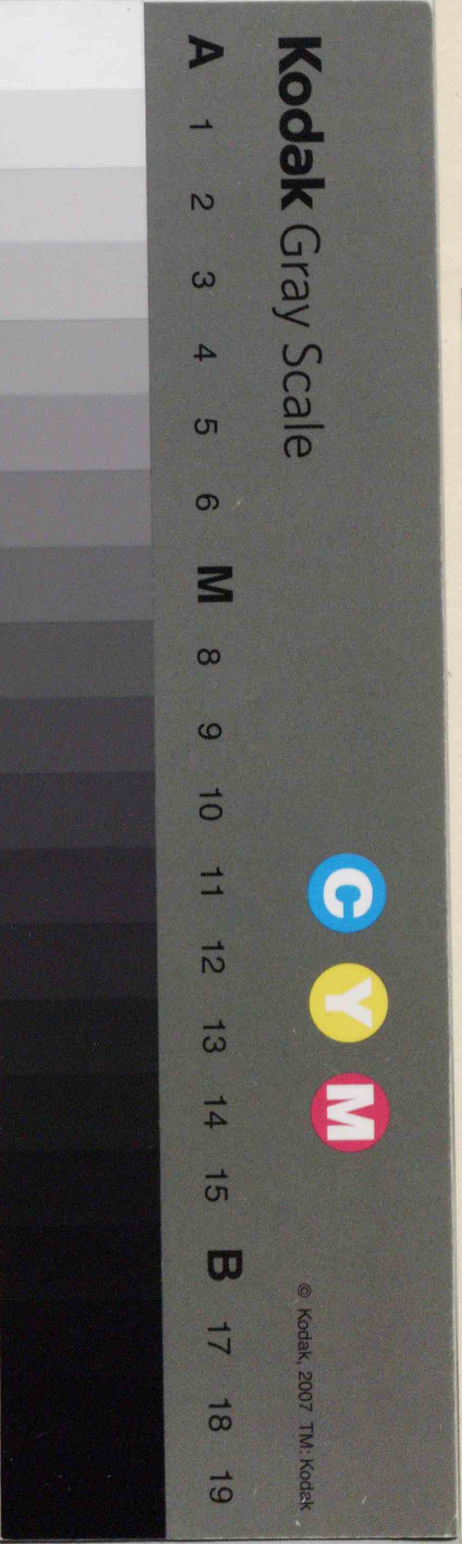
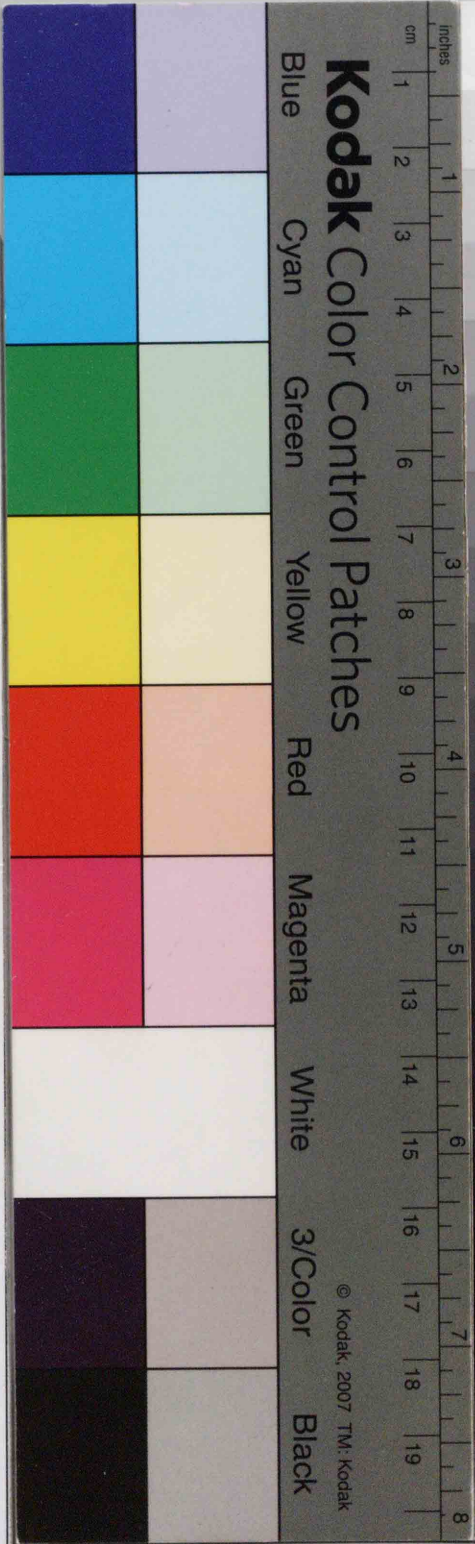


三訂
帝國讀本
卷十

教科書文庫
4
810
41-1923
2000067991



41596

教科書文庫

4
810
41-1923
20000 67991

TL
1923



資料室

教科書文庫

4

810

41-1923

2000067991



目次

訂三 帝國讀本 卷十目次

九	新島守 其の一	四
八	寒山拾得	三
七	百蟲譜	三
六	芳宜園大人の靈を祭る	二七
五	暮秋の雨	二四
四	和歌新調	三
三	落花の雪	一六
二	秋色を觀じて人事に及ぶ其の二	八
一	秋色を觀じて人事に及ぶ其の一	一

42
810
大12

日四十月一十年二十正大
濟定檢省部文

文學博士芳賀矢一編

訂三 帝國讀本

東京 會社 富山房 叢刊

広島大学図書

2000067991



一〇	新島守其の二	四七
一一	清文寸錦	五四
一二	自然と色彩其の一	六〇
一三	自然と色彩其の二	六六
一四	我が國の繪畫	七五
一五	御堂關白	八二
一六	法成寺の造營	八六
一七	萬葉集の歌	九〇
一八	古文學に見えた祖先の面影	九五
一九	詩人杜甫	一〇二
二〇	萬里長城	一〇六
二一	富士の嶺を詠める歌ども	一一〇

二二	花鳥山水	一一四
二三	おのがものまなびのありしやう	一二〇
二四	勅語と壽詞	一二六

自修文

一	國民の抱負	一
二	俚諺論	八
三	東路の旅	一一
四	梅	一五
五	俳句百吟	一八

卷十目次終

三訂帝國讀本卷十

一 秋色を觀じて人事に及ぶ 其の一

三宅雪嶺

春花の爛漫たるは妍まにして艶、秋葉の霜に飽きて丹化するも亦稍相似、其の優劣を談ずる、古より之あり。天智帝の春山萬花の艶と、秋山千葉の彩と、何れか優れると宣へるに、額ひたい田女王應へて、

ふゆごもり、はるさはるさりくれば、なかざりし、とりもきなきぬ。
さかざりし、はなもさけれど、やまをしみ、いりてもとらず。
くさふかみ、たをりてもみず、あきやまの、このはをみては、

(一)天武天皇の姫

はるさはるさりく

一 秋色を觀じて人事に及ぶ 其の一

一

もみぢをば、とりてぞしぬぶ。あをきをば、おきてぞなげく。
そこしおもしろし、あきやまわれは。

と霜葉の二月の花に優るを陳べにき。而も女王の擇びし所
は他の必ずしも肯ぜざる所、人各判断を異にし、決着に到ら
んこと難し。今は姑く言はじ。但し春を觀るに寒風樹を吹く
の時、梅花まづ蕾を破りて、清香衣袖に溢れ、之に續きて桃續
きて櫻、海棠然る後、萬花妍を競ひ、紅紫山野に滿つ。花に嫩葉
の綠を添ふるあり、添へざるあるも、皆枝條に點綴し、瓣の軟
風に吹れて、繽紛飄落するは、眞に優にして、裏なるを示すも
の稱して美とせんか、春は即ち艷麗とすべし。

宇宙朗曠

更に秋を觀るに、秋碧空に浮びて、宇宙朗曠、滿目唯濃黃と
爲り、渥丹と化し、黃なるは黄金を敷き、丹なるは錦欄を張り、

枝條に點綴す

壑に懸り溪に亘りて、錦障を聯ぬるの狀を現す。色彩を以て
すれば、遙かに春花に優るとすべく、而して丹朱爛然として
野火の烘ゆるが如きは、寧ろ甚だしきに過ぐ。同じく稱して
美とせんか、秋は即ち宏壯とすべし。

秋の景色は實に天高く、氣清み、草木齊しく色を變じ、野に、
山に、燦爛として光彩眼を奪ふ。しかも其の極るの時は、正に
これ樹葉飄零して、寂寥の觀を呈するの時、歐陽修が秋聲賦
に、初淅瀝以蕭颯、忽奔騰而砰湃、如波濤夜驚、風雨驟至、其觸於
物也、鏗鏘錚錚、金鐵皆鳴、又如赴敵之兵、銜枚疾走、不聞號令、但
聞人馬行聲。と、其の秋聲とは即ち凋槁せる樹葉の、互に接觸
し、若しくは飄零して窓を撲ち、地に墜つるを指せるもの、其
の一望丹黃華麗を盡せる所は、かくして搖落し、慘澹慄烈た

(一)宋の人、字は永叔、唐宋八大家の一

淅瀝 物ニクイ 雨ニクイ

慘澹慄烈

らんとす。

古來人の春花を引きて譬喩するもの多し。梅花の寒を凌ぎ、雪を冒し、玉肌芳香を放ちて而して散去る。いはゆる魁カキけてこそ色も香もあれといふの類なり。されど秋葉の丹化し、綉シロを纂め、錦を綴り、璀璨サンとして目を眩まし、然る後飄零して舉げて一空に歸するも、亦頗る見るべからずとせず。之を人事に喩ふる、少壯事を起し、險を冒し、一敗して命を殞す。悲惨、悽愴人をして哀れを催さしむるも、年既に老い、經歷あり、功勞ある身にして、尙發憤事を舉げ、運命に安んじて、從容生を授くるは、他の感を惹くの一層深き事あり。敦盛の一谷に陣歿せる、今に及びて尙人の説くところ、須磨の邊に種々の遺物あり。或は敦盛蕎麥などいふもあり。遺物の偽造なるは言

綉を纂め錦を綴る

ふまでも無けれど、附近の地に名勝古蹟の人言に上る、能く之が右に出づるあらず。而もこれ唯事情の哀れなるが爲にして、宛も春花の早く香を放ち、軟風に飄落すると同じ。齋藤實盛齡七十、鬢髮を黒くして戰場に臨み、軍利あらずして、餘衆皆退散せるに、乃ち單身留り戦ひ、我が頭を斬り、木曾公に獻ぜよ。と呼ばはりて死したる如き、はた又三浦義明の九十に垂んとして、頼朝の舉兵を援け、戦敗れて頼朝の死を聞き、其の子に語りて曰ふ、公は一敗を以て死する者ならず、汝等必ず索めて隨へ。我は年老いて行く能はず、留りて此處に死せん。と、遂に命を敵刃に殞し、が如き、一種限りなき悽愴の感を人に與ふ。年老いて其の終を潔くするは、普通の事情の哀れを催さしむると違ひ、秋葉の爛然ハルハルとして萬丈の錦を織

搖落す

驕倨放肆

ナコリ

り、而して秋風に搖落するの形あり。

禽鳥の死に臨みて美音を發するあると同じく、人も亦老後に奮躍して死を妙にするあり。清盛の位人臣を極め、驕倨放肆、憚ること無きや、誰とて之を憎く感ぜざるは無きも、其の病みて將に死せんとし、吾死するの後は必ず佛に供へ經を唱ふること勿れ。唯願はくは頼朝の頭を斬りて墓前に懸けよ。と言へる、幾分の同情を惹くに足るなり。頼朝は業遂げ、志成り、手に兵馬の權を握りて永久の基を立てしかど、臨終の際に特に見るべき無く、或は兇手に斃れたりとさへ傳へらる、彼資性善く忍び、喜怒色に現れず、深く謀り遠く慮り、坐ながら天下を制御するに至れる、以て器度の一世に超卓せしを見るに足るも、天真を發露して人心に愉快を感ぜしむ

器度

耳順
鵬搏萬里

るに至りては、却つて之を清盛に看ること多し。秀吉既に天下を一統し、齡亦耳順に及び、乃ち鵬搏萬里、師を朝鮮に出し、進みて明に入らんとし、陣營に勞する約そ七年前には必勝の算を立て一々皆中りしに、是に於て計る所數、齟齬し、竟に何の得る所なくして終りたるが、其の豪邁雄略、人心を發動するの大なるは、即ち茲に存す。これ亦終を壯にせるものと謂はざるべからず。家康は慎計密謀、いはゆる子規に對し鳴くまで待たんとせしもの。勝利を萬一に期し、敢へて危道を踏むが如きことなく、隨ひて大慘事なく、大快事なきも、上杉氏東に起りて、檄を傳ふる、直ちに赴きて之を伐ち、而して石田等以て計策の中れりとし、虚に乗じて大軍を西に集むるや、遽に軍を旋して關ヶ原に會戦し、親ら馬を躍らして、諸軍

慎計密謀

危道を踏む

安を貪らず

を指揮したるは、戦略の見るに足る無きにせよ、意氣の頗る壯なるを見るべし。後十餘年を歴て、歳既に七十を超え、曾大坂の役あり、前後二役共に大軍を督して之に臨み、終に覇業を定めたる、老いて益壯にして、徒に安を貪らざるを知るべく、其の行爲の人に愉快を覚えしめざるに拘らず、猶當時に傑出したるの疑はれざる所以なり。

二 秋色を觀じて人事に及ぶ 其の二

西郷隆盛功成り名遂げて故山に歸臥し、然る後壯丁を提(一)げて三太郎を越え、九州を震動せしめしが、此の如きは理の見るべき無く、若し養成せし健兒の、既に事を發して復制する能はず、己獨り生くべからずとして之に一命を授けたり

歸臥す

(一) 肥後華北郡。肥後より薩摩に入る國道に當る三箇の峠に津奈木太郎、佐敷太郎、松太郎をい赤

(一) 日向國白杵郡。

非命に死す

とする、餘りに力なきに過ぎたり。將力能く之を制するに堪へしも、實に自ら之を率ゐて政府を覆し、以て大いに志を逞しくせんとする、即ち餘りに無謀に過ぎたり。いづれより見るも稱するに足らずと雖も、而も老西郷の一生は、即ち此の戦争を以て、更に一段の生氣を添ふるあり。其の可愛の岳(一)に籠守し、四面遁るゝに地なかりし時、部下數百を將ゐて奮闘圍を脱し、故山に還り笑を含みて死したる、殆ど終を詩的にせるなり。何の爲に起りて、何の爲に戦ひたるか、意志判然たらざるも、其の判然たらざる所、却りて豪傑の豪傑たる所を表す。若し彼をして非命に死する無く、徐に天命を終へしめたらんには、位は元勳の首座を占め、聲望當代に並び無かりしならんも、其のいづれが生涯を豪壯ならしめたるかは言

策士

ヨシト
ヨシト

成敗利鈍

(1) Onon.
外蒙古、黒龍江の上流、
朽ちたるを
推さ枯れたるを
を拉ぐ

はずして知らる。孔明年二十七出でて三分の計を畫し、奇策縦横謀る所成り、成る所功ありしが、而もみな策士流の事、當時策に於て之に匹儔すべき者其の人に乏しからず。而して多く稱するに足らず。只夫れ窮時に方りて顧託を受け、遺孤を擁して艱險に當る。誠意忠節、少しも權を挟み私を營むの跡なく、成敗利鈍逆め料り難く、鞠躬盡力死して後已まんを期し、出でては將入りては相病を力めて大事を處し、遂に陣中に終りしが、群雄の中に特出し、人臣たる者の儀表と爲れる實に此に於てし、彼はこれを以て殆ど聖の域に到り、三代荒唐の時代と雖も、能く及ぶ鮮し。成吉思汗、難河畔に起りて四方を經略し、雄師向ふ處朽ちたるを推さ、枯れたるを拉ぐが如く、西亞

(一) 甘肅省。

(二) 阿骨打の滿洲に立てたる王國、十世百二十年間。

(三) 陝西省、華陰縣の東。

(四) 今の河南省開封府。

(五) Chatham. 英國の政治家、少ヒット家の父なる老ヒットと稱す。

を蕩定して東歐を侵占す。然るも其の累りに領土を拓けるは、宛も蠻酋の暴力を振ひて止るを知らざるの觀あれど、還りて六盤山(一)に到り、病みて死せんとする、左右に語りて曰ふ、(二)金の精兵潼關(三)に在り、南は連山に據り、北は大河を限る。以て遽に破り難し。道を宋に假るに如くは莫し。宋と金とは世讐、必ず能く我に許さん。乃ち兵を唐鄧(四)に下し、直ちに汴京(五)を撞け。汴急ならば必ず兵を潼關に徵さん。然して數萬の衆を以て千里赴き援はさ、人馬疲弊し、到ると雖も戰ふ能はず。之を破らんこと必せり。と其の敵を料り、勢を察する、實に掌を指すが如く、眞に智略の遠く人に超えたるを見る。

(五) チャタムは一代の偉績、英國の威名をして隆々世界の表に耀揚せしめ、世に第一流の政治家を以て目せらる、而も其

誅求

Richmond.

Bourbons.
當時の佛國王

Philip

Sidney.
英國の貴族。
文武に通じ一
代に才名あり
し人。(西曆一
五五七—一五
八六)
Elizabeth.
英國の女皇。
(在位西曆一
五五八—一六
〇三)

の大なるの感ぜらるゝは此に在らず既に官を罷めて後英政府の米洲植民地に苛政を施きて誅求到らざる無きを攻撃し、以て雙者の間を善くするに努め、而して一旦米の佛と勢を聯ねて逆ひ抗し、而してリッチモンドが戦争を不利として講和を主張せるに及び、翻然前説を棄て、病を扶けて議院に臨み絶叫すらく、ブルボンの前には決して膝を屈すべからず、飽くまで戦争を繼續して、最後の勝を占めざるべからず、と、氣昂り、胸塞がり、其の場に卒倒し、昇がれて家に歸り、終に暝したる、これ誠に七十年の生涯を振はしむるに足れり。フィリップ・シドニーはエリザベス女王の眷顧を被り、名を當代に騁せにき、而も後人の感歎して措かざるは、特に其の臨終の光輝を放てるに於てす。英軍に將として和蘭を援

氣息奄々

け西班牙と戦ふや、飛丸に腿を貫かれて倒れ、流血淋漓、渴を覺ゆる頻なり。従者百方搜索して僅かに一杯の水を得、捧げて其の前に到る。傍に一兵卒の傷つき倒るゝあり、氣息奄々、従者の盃を捧ぐるを凝視して、心に大いに羨むもの如し。シドニー盃を口にせんとして、偶之を看、乃ちいふ、彼の之を要する吾よりも多からん。と、盃を垂死の傷兵に與へたり。これ後人の、今に及びて尙嘖々として稱する所。若し彼が最期に於て此の事無かりしならんには、シドニーの名は、或は遺れられたるやも知るべからず、而も年壯なるシドニーの光輝ある最期や、寧ろ爛漫たる、春花の風に散ると狀を一にし、麗は則ちこれ有るも、未だ壯とすべきに至らず、之に反し、前に列記せる數者の齡傾きて尙志せる所に淬勵奔勞し、斃れ

て而して後に已みしは、以て麗とすべからずと雖も、壯は則ち餘りあり。

人の世に處する事を遂げ、功を奏せる者何ぞ限らん。身を顯榮の地に陞し、者亦甚だ多し。然るもしかして後十年、二十年、若しくは三十年の餘命を保ちながら、却つて一事の成る無く、一功の擧る無く、唯碌々無爲、食ひて臥し、覺めて食ふこと、犬豚と擇ぶ無く、爲に前年の功績を遣れられ、甚だしきは死生の分明ならざるあり。彰著の功を樹て、幾何ならざるに世を捐つるか、然らずんば老に及びて、掉尾の飛躍を演ずるか、いづれか其の一に出づるに非ずば、以て英雄の面目を完うし、盛名を久しきに傳ふる能はず。即ち春の景色となるか、秋の景色となるか、必ず花々しき最期を遂げ、以て一生

犬豚と擇ぶなし

掉尾の飛躍

を艶麗若しくは宏壯ならしむるを要すべし、但し秋に入りて草木多く色を變じ、光彩燦爛一時の壯觀を盡し、然る後飄零凋殘し去るとはいへ、是等多くの草木を外にして、更に松柏の凋むに後るゝあり。固より萬木悉く然りとし、一を以て總べてを律すべきにあらず。彼の松柏の屬、四時を貫きて緑を變へず、目を眩するの紅彩、人を悦ばすの麗色を缺き、一歳の間特に觀て賞美するの時なしと雖も、其の蒼幹數十丈、亭亭として空を凌ぎ、天に參り、枝條は四方に張りて蓋の如く、翳鬱として烟霧を罩め、隆冬を經、霜雪を冒し、長へに青を更めざる、實に變化の外に出づるものと謂ふべし。これあるか、これあるか、これ亦察せずんば有るべからず。——想痕——

(一)「またや見ん
交野のみ野の
櫻狩、花の雪
ちる春の曙」
(新古今集)
(二)河内國北河内
郡
藤原俊成
(三)朝まだき嵐
の山の寒けれ
ば紅葉の錦
さばぬ人ぞな
き(新古今集)
藤原公任
(四)近江國滋賀
郡
(五)一貢物たえず
そなる東路
の勢多の長
橋音もといろ
平兼盛
(六)近江より朝
立ちくればう
ねの野に鳴く
鶴ぞなくなる
明けぬこの夜
大歌(古今集)
(七)白露も時雨
もいたくもる
山は下葉の
こらす色つき
にけり(古今
今集、紀貫之)

三 落花の雪

落花の雪に踏迷ふ、交野の春の櫻狩、紅葉の錦着て歸る、嵐
の山の秋の暮、一夜をあかす程だにも、旅寝となれば物憂き
に、恩愛の契淺からぬ、我が故郷の妻子をば、行方も知らず思
ひ置き、年久しくも住馴れし、九重の帝都をば、今を限りと顧
て、思はぬ旅に出て給ふ、心の中ぞあはれなる。
憂きをば止めぬ逢坂の關の清水に袖濡れて、末は山路を
打出の濱、沖を遙かに見渡せば、潮ならぬ海にこがれ行く、身
をうき船の浮き沈み、駒もとゞると踏みならず、勢多の長橋
打渡り、行きかふ人にあふみ路や、世をうねの野に鳴く田鶴
も、子を思ふかとおはれなり。時雨もいたく守山の、木の下露
に袖ぬれて、風に露散る篠原や、篠分くる道を過行けば、鏡の

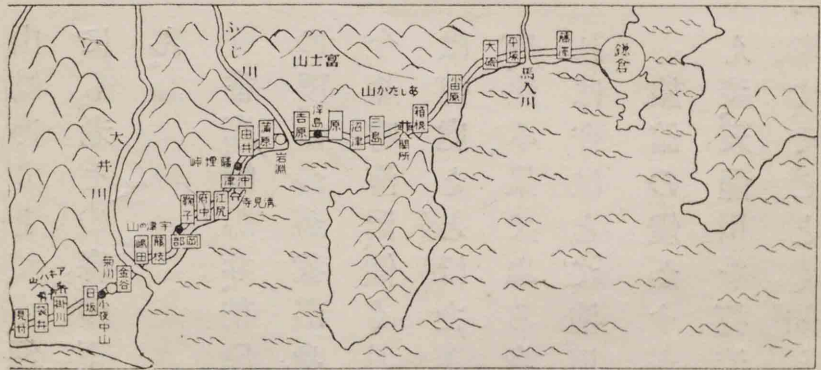
(一)一人住まぬ不
破の關屋の板
底、荒れにし
のち(新古今
今集、藤原良
經)
(二)小夜千鳥聲
こそ近くなる
みがた、かた
や満つらん(藤
原季能)

山はありとても、涙に曇りて見えわかず、物を思へば夜の間
にも、老その森の下草に、駒を留めて顧る、故郷を雲や隔つら
ん。

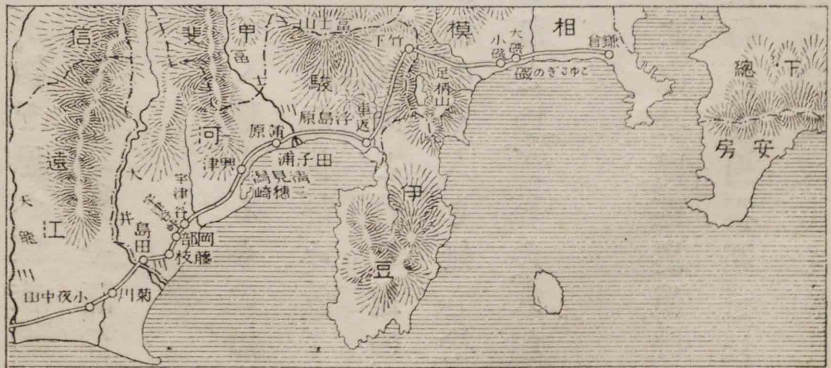
番場醒が井、柏原、不破の關屋は荒果て、猶もるものは秋
の雨、いつか我が身のをはりなる、熱田の八劍伏拜み、沙干に
今や鳴海瀉、傾く月に道見えて、明けぬ暮れぬと行く道の、末
は何處ととほたふみ、濱名の橋の夕汐に、引く人も無き捨小
舟、沈み果てぬる身にしあれば、誰か哀れとゆふ暮の、入相な
れば今はとて、池田の宿に着き給ふ。

旅館の燈かすかにして、雞鳴曉をもよほせば、匹馬風に嘶
えて、天龍川を打渡り、小夜の中山越え行けば、白雲路を埋み
來て、そことも知らぬ夕暮に、家郷の天を望みても、むかし西

(一) 年たけてま
たこゆべしと
思ひきや、命
なりけりさや
の中山。新
古今集、西行
法師



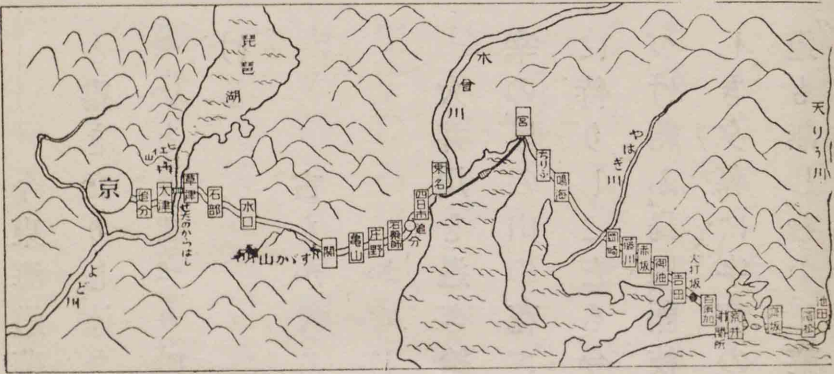
行法師が命なり
けり。と詠じつゝ、
ふたゝび越えし
跡までも羨まし
くぞ思はれける。
隙行く駒の足
早み、日已に亭午
にのほれば、餉進
むるほどとて、輿
を庭前にかき止
む。轆を叩きて警
固の武士を近づ



(一) 遠江國榛原郡

(二) 仲恭天皇の承久三年

(三) 中御門中納言藤原宗行



け、宿の名を問ひ
給ふに、菊川と申
すなり。と答へけ
れば、承久の合戦
のとき、院宣書き
たりし咎に因り
て、宗行卿關東へ
召下されしが、此
の宿にて殺され
し時、
昔南陽縣菊水、
汲下流而延齡



今東海道菊川。宿西岸而終命。

と書きたりし、遠き昔の筆の跡、今は我が身の上になり、哀れやいとゞまさりけん、一首の歌を詠じて、宿の柱にぞ書かれける。

古もかゝるためしをきく川の

おなじながれに身をや沈めん

大井川を過ぎ給へば、都みやこにありし名なを聞きて、龜山殿かめやまのどのの行幸の嵐あらしの山の花ざかり、龍頭りゅうづつ鷓首せびきの船に乗り、詩歌管絃しげくわんげんの宴うたげに侍りしことも、今は二たび見ぬ夜の夢となりぬと思ひつづけ給ふ、島田藤枝しまだふじえにかゝりて、岡邊おかべの眞葛まがせうら枯れて、物悲しき夕暮ゆふぐりに、宇都うとの山邊やまべを越え行けば、蔦つづみかづらいと茂りて道も無し、むかし業平なりひらの中將ちゆうじやうの、すみかを求めんとて、あづま

(一)山城國葛野郡嵯峨にあり、今の天龍寺これなり。

(一)駿河なるうつの山べのうつにも、夢にも人に逢はぬなりけり。
(伊勢物語)

(二)富士のねの煙はなほぞ立ちのぼる、上なきものはおもひなりけり。
(新古今集、藤原家隆)

の方へ下るとて、夢にも人に逢はぬなりけり。と詠みたりしも、かくやと思ひ知られたり。清見瀉しみせを過ぎ給へば、都にかへる夢をさへ、通さぬ波の關守せきりに、いとゞ涙をもよほされ、向ふはいづこみほが崎、興津、蒲原ふらうち過ぎて、富士の高嶺たかねを見給へば、雪の中より立つ煙、上なき思に比べつゝ、明くる霞かすみに松見えて、浮島うきしまが原を過行けば、汐干しほひや淺き船見えて、おりたつ田子たごのみづからも、浮世をめぐる車返くるまかへ、竹の下道たけのしたみち行惱む、足柄山の峠とがより、大磯おほいそ小磯こいそ見下して、袖にも波はこゆるぎの、いそぐとしもは無けれども、日數積れば七月二十六日の暮程に、鎌倉かまくらにこそ着き給ひけれ。

——太平記——

四 和歌新調

打笑みて膝にはひよるかなしさは
高崎正風

わが子人の子かはらざりけり
入江爲守

かやぶきの伏屋の軒になびけども
たふとく見ゆる日の御旗かな
東坊城徳長

大路ゆく人の絶間におりたちて
あさる雀のいそがしげなる
井上通泰

杉垣のしたをくゞりてやり水の
上流の滝の音

うき世にいづる聲きこゆなり

千葉胤明

敷島の大和心をかたちもて
みするに似たり富士の神山

春日さつふ
みはつす
みそなはす
かみよろけ
かかるとむ

春日さつふみはつすみそなはすかかるとむ

高崎正胤筆蹟

一つもて君をいははん一つもて

落合直文

おやをいははん二もとある松

正岡子規

縁先に玉巻く芭蕉玉とけて

五尺の緑手水鉢をおほふ

佐々木信綱

ゆく秋の大和の國の薬師寺の

塔のうへなる一ひらのくも

尾上柴舟

しづやかに月はてりたり天地の

心とこしへうごかぬがごと

五 暮秋の雨

加藤千蔭

八月二十日あまり、秋のけはひの懐かしくて、例の隅田川のほとり、石濱の庵にゆきて宿りぬ。有明の月のにほひも、霧たちわたる曉のさまも、所がら世に似ぬものから、ここは雨

春の野に
あそぶに
千蔭
白妙の袖か
けはひの袖か
ゆけるふも
りゆらむな

のそぼふる日なん、殊にあはれは深かりける。もとより萱葺ける庵なれば、音だになくて、軒の雫の三つ四つ落ちそむるより、籬の萩の下葉の色づきたるが、ほろくと散るもあは

音のけし

あそぶに
千蔭

白妙の袖か

ゆけるふも

加藤千蔭筆蹟

れなり。水の面は動くともなくて鏡の如くなるに、雲の濃き淡きうつろひて、かつ浮び

かつ消ゆる水沫にこそ、雨のけはひはしるかりけれ。水脈の一筋は、さしひく汐にもまじらで、とはに縹の色に流れいに、沖に出づめり。これや、水上の秩父の山の眞清水の落來る

ならん。打向ふ岸の榛原のみ、濃き墨がきの如くなるが中に、
 柞の黄ばみたるは、さすがにほのかに見えて、そのひまゝに
 より長き堤の見えわたるに、堤のをちなる梢は、やうく薄墨も
 てかき消したらん如くいと遙けきは、たゞ靡かぬ煙とのみぞ見ゆる。
 こゝかしこより鳥の飛行きつゝ、峙の鷺の翅重げに起出でて、河の瀬の眞菰にあり立てば、みさご
 の群れ來て、水の面に浮べるもをかし。上つ瀬より、筏師の簑
 笠着て、棹を筏の上に横たへ、おのれこまぬきて、思ふ事なげ
 に居り、筏は水のまに／＼流れ行くもしつけれし。渡守舟さし
 いだせば、大笠傾けて渡りゆく人の、やがて堤をあるくさま
 も繪によく似たり。すべて一日の中に、筑波嶺より吹きおろ
 すかと思へば、沖よりも風通ひ來て、岸の木立も、長き堤も、あ

るは現れ、あるは隠れて、限りなき青海原に向ひたらんやう
 に覺ゆる折もありけり。かくてやゝ夕ぐれ近くなりゆけば、
 群鳥のおのがじし峙を求むるに、雁の一つら二つら渡り行
 くなどえもいはん方なし。暮れはてゝも、なほ行く水の色の
 み遠白く残りて、川添小田にいはへる水分の神のみ火の、海
 女のいさりともしいふべく、かすかに見え渡るも哀れなり。

秋ふけて小雨そほふる隅田川

たが墨がきのすさびなるらん。

—うけらが花—

(一)加藤千蔭。

六 芳宜園大人の靈を祭る 村田 春海

こゝに文化の五とせ九月八日、平春海謹みて、芳宜園の大

うなねつき
このかみ

賀茂眞淵。

おととえ

世のさが

人のおくつきの御前に菊の初花一枝をたむけ、香の木一ひら
らを焼きて、うなねつきで申さく。あはれ悲しきかも、君は吾
に十といひて一とせのこのかみにおはするなるが、今その
かみを思ひ出づるに、君はまさにかりの齡におはして、吾
はまだわらはにてぞ侍りける。常に縣居の庭に物學びにゆ
きかひたる時、あしたに参るとしては君のみはかしのしりへ
に従ひ、ゆふべに罷るとしては君の御袖のもとに縋りて、相う
るはしみまつれること、親子はらからにも何か異ならん。書
讀むとては君を師ともたふとみ、歌作るとしては我をおとと
えのつらにぞ教へ給ひける。

中ごろにして、君は仕の道に暇なくおはし、吾は世のさが
にかゝづらひて、おのづから疎き方にも過ぎつるを、君仕を

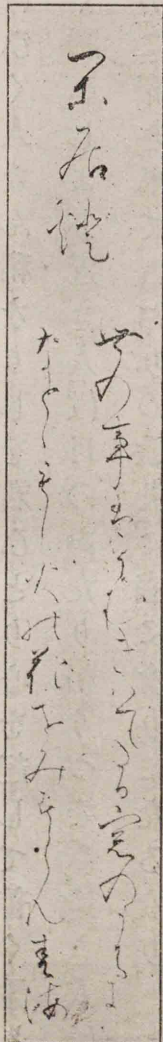
しぞく

ありふる

まめごと
あだごと

閑居燈はそ
むきはてそ
むきのうち
る窓のち
になど燈の
花を見ずら
ん春海

しぞき給ひて後は、吾も同じ巷に移り住めば、花を尋ぬとて
は吾道しるべをなし、月を思ふとては君が舟に相乗り、憂き
事も共に憂へ、喜ばしき節も共に喜びて、世にありふる業の、
まめごとあだごと、かたみに隔なく心をかはせつるこ



蹟筆海春田村

と、今にはたとせ、其の初を繰返し數ふればあひ友たること
既に五十とせにぞ餘りける。さるを今おくれ奉りて、いつの
世にか相見ん、いづれの時にかこととはん。常無きは人の身
の習ぞと知れど、これをいかでか歎かざらんか、るを誰か
はよく堪へん。

(一)「宋人有耕田者。田中有株。兔走觸之。折頸而死。因釋其耒而守株。冀復得兔。兔不可復得。而身爲宋國笑。」(韓非子)

(二)「楚有涉江者。其劍自舟中墜于水。遽刻其舟曰。是吾劍所從墜也。舟止。從之。入水求之。舟已行矣。而劍不行。求劍若求行。此亦惑也。」(呂氏春秋)

あはれ悲しきかも。文の林世々に衰へ、言の葉の道日々に下りゆけるを、賀茂の翁世に出でて、今を捨て、古に復り、青雲の高き心しらひを求め、賤機(一)の文あるみやびごとを尊みいへれど、くひぜを守り、舟(二)にきだつくる輩、かれに泥み、こゝにひかれて、尙怪しみとがむる類は多く、たまあひてよくうけひく人なん稀なりしを、君ひとり心を起して、普く諭し、廣く誘ひしより、近き人は目のあたり相うづなひ、遠き人は遙かに靡き來て、古ぶりの歌世に盛になりたるなり。

其のおのづから詠みいで給へる歌を見るに、古き調、新しき姿、とりどりに備らざるはなし。其の古を寫せるは藤原、寧樂の御世に及び、後の巧に倣へるは堀河、鳥羽の御時に下らず。心に思ふ事は口に盡さゝることなく、目に觸るゝものは

面おこし
價なき寶

言葉にのせざるゝとなんあらざりける。これを見て、たかきもみじかきも、めでたふとまざる人なし。また事好みの人は、其の名を知られては、身の面おこしと思ひて世にも誇り、君のひと歌を得ては、價なき寶にもかへじといひてぞ深く喜びける。

言あげ

然るを今黄金の聲忽ち止みて、玉の響再び聞えずなりぬるは、わがどちの歎のみかは、おほかたの世の人の憂ともいひつべし。これをいかでか惜しまざらんかゝるを誰かは慕はざらん。あはれ悲しきかも。わがかく言あげするを、泉の下にもさやかにきこしめし、天翔りても遙かに見そなはせとなん申す。

—琴後集—

(一)古今集序「花
になく鶯、水
に住む蛙の聲
を聞けば、生
きとし生ける
もの、いづれ
か歌をよまざ
りける云々」

(二)「やがて死ぬ
けしきは見え
ず蟬の聲」
(芭蕉)

景物

五月の闇

七 百蟲譜

横井也 有

蛙は古今の序に書かれてより、歌よみの部に思はれたる
こそ幸なれ。朧月夜の風しづまりて、遠く聞ゆるはよし。古池
に飛びて翁の目覺したれば、此の者の事、更にも謗り難し。
蟬はたゞ五月晴に聞きそめたる程がよきなり。やゝ日ざ
かりに鳴きさかる頃は、人の汗しぼる心地す。されば初蝶と
も、初蛙ともいふ事をきかず、此のものばかり初蟬といはる
るこそ大いなる手がらなれ。やがて死ぬけしきは見えず」と、
此のものの上は、翁の一句に盡きたりといふべし。
螢は比ぶべきものもなく、景物の最上なるべし。水に飛び
かひ、草にすだく。五月の闇は唯此の者の爲にやとまでぞ覺
ゆる。然るに貧の學者にとられて油火の代りにせられたる

蜀魂

は此のものの本意にはあらざるべし。歌に螢火とよませざ
るは殊の外の不自由なり。俳諧には其の眞似すべからず。
日ぐらしは多きもやかましからず。暑さは晝の梢に過ぎ
て、夕は草に露おく頃ならん。つくづくほふしといふ蟬は、つ
くし戀しともいふなり。筑紫の人の旅に死して、此のものに
なりたり」と。世の諺にいへりけり。哀れは蜀魂の雲にさけぶ
にも劣るべからず。
蠶の生涯は世の爲に終り、火とり蟲は誰が爲に身をこが
すにか。蜉蝣ははかなきためしにひかれ、蓼くふ蟲は物ずき
の謗となれり。
同じ寶の名によばれて、玉蟲は優しく、こがね蟲は卑し。
蟻は明暮にいそがしく、世の營に隙なき人に似たり。東西

(一)淳于禁家居廣陵。宅南有古槐樹。禁醉臥其下。夢見王曰。吾南柯郡。凡二十載。使者送。出穴。遂寤。尋古槐下。蟻穴。乃槐安國。又。南枝。即南柯郡也。
 (二)宋の文人歐陽修に憎蟻辭あり。
 (三)江戸初世の歌人木下長嘯子に紙魚を哀む詞あり。

に聚散し、餌を求めてやまず。いつか槐安の都をのがれて其の身の安き事を得ん。さるもたよりあしきかたに穴を營みて、千丈の堤を崩すべからず。蠅は歐陽氏に憎まれ、紙魚は長嘯子にあはれまる。
 蝸牛は只水にあるべき者の、いかで草葉に遊ぶらん。家持ちたれども、行く先々を負ひ歩くは、雲水の安きにも似ず。蟻の瘦せたるも、斧を持ちたる誇より其の心いかつし。人の上にも此のたぐひはあるべし。
 蟹の歩にたとふべきものこそ無けれ。たゞ原吉原を、駕籠にのりて、富士を眺めゆく人には似たり。
 促織、鈴蟲、響蟲は其の音の似たるをもて名によべり。松蟲の其の木にもよらぬに、いかでかく名を附けたるならん。毛

むくつけし



竹林の七賢 (狩野元信筆)

生ひむくつけき蟲にも同じ名ありて、松を枯し、人に疎まる。一つ在所に二人の八兵衛ありて、一人は後生を願ひ、一人は殺生を事とす。これ松蟲のたぐひなるべし。
 きりくすのつりさせとは、人のために夜寒を教へ、藻に棲む蟲はわれからと、たゞ身のうへを歎くらんを、蓑蟲のちよと呼ぶは、いとやさしげなり。されど、父のみ戀ひて、なか母を慕はざるらん。

端居

(一)支那晋の世の隱者。嵇康、阮籍、山濤、向秀、劉伶、王戎、竹林七賢といふ。

(二)唐の隱者。豐巖、明巖の二巖あり、常に其の寒巖に居るを以て寒山居士と云ふ。拾得と親し。唐の奇僧。初め遺兒たりしが、拾得は師を善くす。詩を善くす。

蚊は憎むべき限りながら、さすが卯月の頃、端居めづらしき夕、はじめてほのかに聞きたらん。又は長月の頃、力なく残りたる、さびしきかたもあり。蚊帳つりたる家のさま、蚊遣焼く里の烟など、かつは風雅の道具ともなれり。藪蚊は殊にはげしきを、かの七賢の夜咄には、いかに團扇のひまなかりけん。

——鶉衣——

八 寒山拾得

坪内逍遙

舞臺正面は二間の床の間、それに相應した大幅の掛物は雪舟筆に擬したる墨畫の寒山拾得と見せて、背景だけが畫立方は寒山拾得に扮裝ちて、活人畫式に背景に接近して立つ。二人とも鼠がかりたる服に古びたる墨染の腰衣。一人は巻物を、一人は箒を携へてゐる。はじめ謠曲が、り、中頃より長唄。

棲遲
觀自在

能に似せたる舞踏の振。本行は歌舞伎を對して、言葉いふ言葉。

(一)周代の音楽。家琴の名手。鍾子期よく其の子期死するに及び、琴を破りて、また彈せざりきといふ。

「粵に寒巖に居して、既に經たる凡幾年、棲遲して觀自在なり。時に歌曲を口ずさんで、世の憂きふしは白雲の、寂々たるたずまひ。

此の中本行がかりの振ありて、寒山拾得靜かに舞臺の中央へ出る。

「石を枕に芝草を、いつも敷寢のつれづれは、古き佛の書を友、曆なけれど花に知る。春は籃に早蕨を、秋は果實をとり、この山間の樂みよ、我が身ながらに羨まし。二人よろしくありて、拾得は胡坐し、寒山猶徐かに舞ふ。

「聞けよ君、泉が撫づる伯が琴、子期ならなくに我ならで、誰辨へん此の調べ、面白の樂の音や。

拾得立上りて、畫中の松ヶ枝に掛りたる造物の瓢を取下し、二人一緒に舞ふ。

寒「おれぢや。
寒「おれぢや。
拾「ぬしぢや。

二人貌を見合せて、
二人「ハ、、、。

拾「お爺、おのしは幾つになりやる。
寒「おれは虚空と同一年。なんの虚空は死にやるとまゝよ。山
河大地を我が子に有てば、此方は變らていつまでも。
拾「淨裸々、赤洒々。
寒「淨裸々、赤洒々。

よきころより空也念佛の振になる。

「山深く月澄みて、颯々たる松の風、水音清き岩蔭に、鶴の翼を
休めける。

元の通りの畫面にをさまりて幕。

(一)承久三年。
(二)順徳天皇。
(三)仲恭天皇。

九 新島守 其の一

(四)土御門院。
(五)後鳥羽院。
(六)近衛基通の子。
(七)後京極良經の子。
(八)當時の將軍頼經。鎌倉に在り。
(九)後鳥羽院。

四月二十日帝(一)お(二)りさせ給ひ、春宮四つにならせ給ふに讓り申させ給ふ。近ごろ皆此の御齡にて受禪ありつれば、これもめでたき御行末ならんかし。同じき二十三日院號の定ありて、今お(三)りさせ給へるを新院ときこゆれば、御兄(四)の院をば中院と申し、父(五)みかどをば本院とぞきこえさす。此の程は家實(六)のおと、關白にておはしつれど、御讓位の時、道家のおと、攝政になり給ふ。かのあづま(七)の若君の御父なり。さて(八)も院(九)の思し構ふること、忍ぶとすれどやう／＼漏れ

(一)鎌倉幕府方
かつく
御勘事

(二)北條義時



後鳥羽天皇

聞えて、ひがしざまに其の心遣すべかめり。あづまの代官に
て伊賀の判官光季といふ者あり。かつく彼を御勘事の由
仰せらるれば、身方に参りつる
つはものども押寄せたるに、遁
るべきやうなくて、腹切りてけ
り。まづいとめてたしとぞ院は
思し召しける。
あづまにもいみじう慌て騒
ぐ。さるべくて身の失すべき時
にこそあなれと思ふものから、
討手の攻来りなん時に、はかなきさまにて屍を暴さじ。おほ
やけと聞ゆともみづからしたまふ事ならねば、かつはわが

(一)北條時房。
(二)義時の長子。
たなびかせ

うしろめた
き心

身の宿世をも見るばかりと思ひなりて、弟の時房と、泰時と
いふ一男と、二人を頭として、雲霞の兵をたなびかせて、都に
上す。泰時を前に据ゑていふやう、おのれを此のたび都に参
らするは思ふ所多し。本意の如く清き死にをすべし。人にう
しろ見えなんには、親の顔また見るべからず。今を限りと思
へ。賤しけれども義時君の御爲にうしろめたき心やはある。
されば横さまの死にをせん事はあるべからず。心を猛く思
へ。おのれ打勝つものならば、二たび此の足柄箱根は越ゆべ
し。など泣くく、いひきかす。まことにしかなり。また親の顔
拜まんこともいと危しと思ひて、泰時も鎧の袖をしぼる。か
たみに今や限りと、哀れに心細げなり。
かくてうち出でぬる又の日、思ひがけぬ程に、泰時唯一人

とばかり

かしこまりを申す

鞭をあげて馳來たり。父胸うち騒ぎて、「いかに」と問ふに、軍のあるべきやう、大方の掟などは、仰の如く其の心を侍りぬ。もし道のほとりにも、はからざるにかたじけなく鳳輦を先立て、御旗をあげられ、臨幸の嚴重なることも侍らんに参りあへらば、其の時の進退いかゞ侍るべからん。此の一ことを尋ね申さんとて、一人馳歸り侍りき。といふ。義時とばかり打案じて、賢くも問へるをのこかな。其の事なり。まさに君の御輿に向ひて、弓を引く事はいかゞあらん。さばかりの時は、胃を脱ぎ、弓の弦を切りて、ひとへにかしこまりを申して、身をまかせ奉るべし。さはあらで君は都におはしましなから、軍兵をたまはせば、命を捨て、千人が一人になるまでも戦ふべし。といひも果てぬに、急ぎ立ちにけり。

(一)藤原氏。西園寺家の祖。
(二)將軍賴經のこ。賴經は公經の女の母なり。

(三)賴朝をいふ。

(四)藤原殖子。後鳥羽院の御母。
(五)藤原重子。順徳院の御母。

上達部 殿上人

すべる

都にも思しまうけつる事なれば、ものゝふども召しつどへ、宇治、勢多の橋も引かせて、かたきを防ぐべき用意心ことなり。公經の大將ひとりのみなん、御うまごのこともさる事にて、北の方、一條中納言能保といふ人のむすめなり。其の母北の方は故大將のはらからなれば、一方ならずあづまを重く思して、さしいらへもせず、院の御心の輕きこととあぶなかり給ふ。七條院の御ゆかりの殿ばら、坊門大納言忠信、尾張中將清經、中御門大納言宗家又修明門院の御はらからの甲斐宰相中將範茂など、つきく、數多きこゆれど、さのみは記し難し。いくさにまじり立つ人々、此の外の上達部にも殿上人にも數多ありき。
中院はあかて位をすべり給ひしより、言に出でてこそ物

龍馬

し給はねど、世のいと心やましきまゝに、かやうの御さわぎにも、殊に交らひ給はざめり。新院は同じ御心にて、よろづいくさの事なども掟て仰せられけり。

いつの年よりも五月雨はれ間なくて、富士川、天龍などえもいはず漲りさわぎて、いかなる龍馬も打渡し難ければ、攻上る武者どもも怪しくなやめり。かゝれども遂に都に近づく由きこゆれば、君の御武者も出でたつ。其の勢六萬餘騎とかや。宇治、勢多へ分ち遣はす。世の中ひゞき罵るさま、言の葉も及ばずまねび難し。あるは深き山ににげ籠り、遠き世界に落降り、すべて安げなく騒ぎ満ちたり。いかゞあらんと君も御心亂れて、思し惑ふ。かねては猛く見えし人々も誠のきはになりぬれば、いと心あわたゞしく色を失ひたるさまども、

たのもしげなし。六月二十日あまりにや、いくばくの戦だになくて、遂に身方のいくさやぶれぬ。荒磯に高潮などのさしくるやうにて、泰時と時房と亂れ入りぬれば、いはん方なく呆れて、上下たゞ物にぞあたり惑ふ。

一〇 新島守 其の二

あづまよりいひおこする儘に、かの二人の大將軍謀らひ掟てつゝ、保元の例にや、院の上、都の外に遷し奉るべしと聞ゆれば、女院、宮々、處々に思し惑ふこと更なり。本院は隱岐國におはしますべければ、まづ鳥羽殿へ網代車の怪しげなるにて、七月六日いらせ給ふ。今日を限りの御ありき、あさましう哀れなり。ものにもがなや。と思さるゝもかひなし。其の日

(一)山城國紀伊郡鳥羽にありし離宮。
 網代車 今日を限りの御ありき
 (二)とりかへすものにもがなや世の中をあらしなごらはん。(源氏物語河海抄)

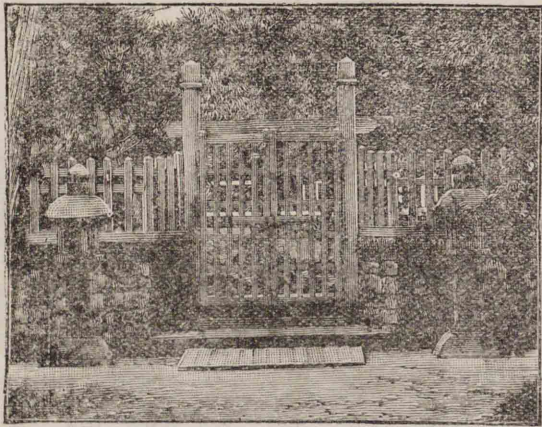
御髪おろす
(一)藤原信實。書家として著る。文永二年(一九二五)歿年七十。

(二)秦の第三世子嬰のこと。始皇の孫。立つて四十六日に漢の高祖に降り秦滅ぶ。

やがて御髪おろす。御年四十に一つ二つや餘らせ給ふらん、
まだいと惜しかるべき御程なり。信實朝臣召して御姿寫し
書かせらる。七條院へ奉らせ給はんとなり。かくて同じ十三
日に御舟に奉りて、遙かなる波路を凌ぎおはします御心地、
此の世の同じ御身とも思されず。いみじういかなりける代
代の報にかと怨めし。新院も佐渡國に遷らせ給ふ。まことや
七月九日みかどをもおろし奉りき。此の卯月かとよ、御讓位
とてめでたかりしに、夢のやうなり。七十餘日にており給へ
る例も、これや始なるらん。(三)唐土にぞ四十五日とかや位にお
はする例ありける。とぞ、唐の文讀みし人のいひし心地する
それもかやうの亂やありけん。さて上達部、殿上人、それより
下、はた残るなく此の事に觸れにしたぐひは、重く軽く罪に

當る様いみじげなり。

中院は初より知るしめさぬ事なれば、東にも咎め申さね



佐渡國眞野陵(順天德皇)

ど、父の院遙かに遷らせ給ひぬるに、のどかにて都にあらん事いと恐ありと思されて、御心もて其の年閏十月十日、土佐國の幡多(一)といふ處に渡らせ給ひぬ。去年のきさ(二)らぎばかりにや、若宮いでき給へり。承明門院の御せうとに、通宗の宰相中將とて、若くて失せ給ひに

御心もて

(一)土佐國の西南幡多郡。

(二)後嵯峨天皇。

(三)土御門天皇の御母在子。せうと

(四)源通子。

北面の下藤

し人の女の御腹なり。やがてかの宰相の弟に通方といふ人の家に止め奉り給ひて、近くさぶらひける北面の下藤一人、

召次

召次などばかりぞ御供つかうまつりける。いと怪しき御手輿にて下らせ給ふ。道すがら雪かきくらし、風ふきあれ、ふききて、來し方行く先も見えず、いと堪へがたきに、御袖もいたく凍りて、わりなきこと多かるに、

憂世にはかゝれとてこそ生れけめ

ことわり知らぬ我がなみだかな

「せめて近き程に。」と東より奏したりければ、後には阿波國に遷らせ給ひにき。

うたて

さても此の度世の有様、げにいとうたて口惜しきわざなり。あるは、父の王を失ふ例だに、一萬八千人までありけり。とこそ佛も説き給ひためれ、まして世下りて後、唐土にも日の本にも、國を争ひて戦をなすこと數へ盡すべからず。それも

よせ

さよみ

むげ

(一)平將門。
(二)藤原純友。
(三)源義親。

(四)後白河法皇。

御裳濯川の流

(五)藤原信賴。
おほけなく
(六)二條天皇。

皆一ふし二ふしのよせはありけん。もしはすぢ異なる大臣、さらでもおほやけともなるべききざみの、少しのたがひめに世に隔りて、其の恨の末などより事起るなりけり。今の様にもむげの民と争ひて君の滅び給へる例、此の國にはいと數多も聞えざめり。されば承平の將門、天慶の純友、康和の義親、いづれも皆猛かりけれど、宣旨には勝たざりき。保元に崇徳院の世を亂り給ひしだに、故院の御位にて打勝ち給ひしかば、天照大御神も御裳濯川の同じ流と申しながら、なほ時の御門を守り給はすることは強きなめり。とぞ古き人々も聞えし。又信賴の衛門督おほけなく、二條院を脅し奉りしも、遂に空しき屍をぞ道の邊に棄てられける。かゝれば舊りにし事を思ふにも、猶さりともしいかでか三皇、今上數多在します

あやなき業

(一)後鳥羽院。

霞の洞

藐姑射の山

振津伊丹
カ屋
カヤ

王城の徒に亡ぶる様やはあらんと頼もしくこそ覺えしに、
かくいとあやなき業の出できぬるは、此の世一つの事にも
非ざらめども、迷の愚なるまへには、猶いと怪しかりし。
六つにて位に即かせ給ひて、十三年おはしましき。おり給
ひて後も、土佐院十二年、佐渡院十一年なほ天の下は同じ事
なりしかば、すべて三十六年が程、此の國のあるじとして萬
機の政を御心一つに治め、百の官を従へ給へりし其の程、吹
く風の草木を靡かすよりもまされる御有様にて、遠きを憐
み近きを撫て給ふ御惠、雨の脚よりも繁ければ、津の國のこ
やのひまなき政を聞し召すにも、難波の蘆の亂れざらんこ
とを思しき。藐姑射の山の峯の松もやうく、枝を連ねて、千
代に八千代を重ね、霞の洞の御住居幾春を経ても空行く月

こと問ふ

けしきばかり
り事をぎたか

日の限り知らず、のどけくおはしましぬべかりける世を、あ
りありてよしなき一ふしに、今はかく花の都をさへ立別れ、
己がちりぐにさすらへ、磯の苦屋に軒を並べて、自らこと
問ふ者としては、浦に釣する蟹小舟、鹽やく煙の靡く方をも、わ
が故郷のしるべかとはかり眺め過させ給ふ御住居どもは、
それまでと月日を限りたらんだに、あす知らぬ世のうしろ
めたさにいと心細かるべし。まいていつを果とか廻りあふ
べき限りだになく、雲の浪、煙の浪の幾重とも知らぬ境に世
をつくし給ふべき御様ども、口惜しといふも愚なり。
此のおはします處は、人ばなれ里遠き島の中なり。海面よ
りは少しひき入りて、山蔭に片そへて、大きやかなる巖のそ
ばだてるをたよりにて、松の柱、葦ふける廊など、けしきばか

柴の庵のし
 ばし(一) 故づく
(二) 後鳥羽院の造
(三) 和漢朗詠集白
 外月一樂三和天
 故人色三五夜中
 心二千里新

り事そぎたり誠(一)に柴の庵の唯(二)し(三)とかりそめに見えた
 る御やどりなれどさる方(四)になまめかしく故づきてしなさ
 せ給へり水無瀬殿思し出づるも夢(五)の(六)様(七)になん遙々(八)と見や
 らるゝ海(九)の眺望(一〇)二千里(一一)の外も残りなき心地する今更めき
 たり汐風(一二)のいとこちたく吹來るを聞し召して
 たり(一三) 増鏡

われこそは新島守よおきの海の

あらしき浪風こゝろして吹け。

一一 清文寸錦

清少納言

四季

春は曙やうやう白くなりゆく山ぎはすこしあかりて紫
 だちたる雲の細くたなびきたる。

夏は夜月のころは更なり闇もなほ螢とびちがひたる雨
 など降るさへをかし。

秋は夕暮夕日花やかにさして山の端いと近くなりたる
 に鳥のねどころへ行くとして三つ四つ二つなど飛びゆくさ
 へあはれなりまいて雁などのつらねたるがいとちひさく
 見ゆるいとをかし日入りはてゝ風の音虫の音などいとあ
 はれなり。

冬は朝雪の降りたるはいふべきにもあらず霜などのい
 と白きまたさらでもいと寒き火など急ぎおこして炭もて
 わたるもいとつきくし晝(一)になりてぬるくゆるびもてゆ
 けば炭櫃火桶の火も白き灰がちになりぬるはわろし。

ふるものは

雪。霰。霰はにくけれど、雪の眞白にてまじりたるをかし。雪に檜皮葺いとめてたし。少し消えがたになりたる程、又いと多うは降らぬが、瓦の目ごとに入りて、黒う、眞白に見えたる、いとをかし。時雨、霰は板屋、霜も板屋、庭。

雲

白き紫、黒き雲あはれなり。風吹くをりの天雲、明けはなる程の黒き雲の、やうやう白くなりゆくもいとをかし。月のと明き面に、薄き雲いとあはれなり。

あてなるもの

水晶の珠數。藤の花。梅の花に雪のふりたる。いみじう美しき兒の覆盆子くひたる。

木の花は

(一)山城國愛宕郡大徳寺邊の舊名

おしり、梅、木、花、て、を、あ、つ、て、

梅は濃くも薄くも紅梅、櫻の花びら多きに、葉色濃きが、枝細くて咲きたる。藤の花、しなひ長く色よく咲きたる。いとめてたし。卯の花は品劣りて何となけれど、咲く頃のをかし。郭公の蔭に隠るらんと思ふにいとをかし。祭の歸さに紫野のわたり近きあやしの家ども、おどろなる垣根などに、いと白う咲きたるこそをかしけれ。青色の衣の上に、白き單かさねかづきたるやうにて、いとをかし。

四月の晦、五月の朔などの頃ほひ、橘の葉のいと濃く青きに、花のいと白く咲きたるに、雨の降りたるつとめてなどは、世になく心あるさまにをかし。花の中より實の黄金の玉かと見えて、いみじくきは、やかに見えたるなど、朝露に濡れたる櫻にも劣らず。郭公のよすがとさへ思へばにや、猶更にい

ふべきにあらず。

梨の花世にすさまじくあやしき物にして、目に近くはかなき文つけなどだにせず。愛敬おくれたる人の顔など見ては、たとひにいふも、げに其の色よりして愛なく見ゆるをもろこしに限りなき物にて、文にも作るなるを、さりともあるやうあらんとて、せめて見れば、花びらのはしに、をかしき句こそ、心もとなくつきためれ。さては猶いみじうめてたきことは類あらじと覺えたり。

桐の花、紫に咲きたるはなほをかしきを、葉のひろごり、様うたてあれども、又他木どもとひとしう言ふべきにあらず。もろこしにことごとしき名つきたる鳥の、これにしも住むらん、心ことなり。まして琴に作りてさまごとくなる音の出で

さりともあるやうあらん

うたてことごとし

くるなどをかしとは世の常にいふべくやはある。いみじうこそはめてたけれ。

木のさまざまにくげなれど、樗の花いとをかし。枯ればなに様ことに咲きて、かならず五月五日に逢ふもをかし。

風は

嵐。木枯。三月ばかりの夕暮にゆるく吹きたる花風、いと哀れなり。曉、格子、妻戸など押開けたるに、嵐のさと吹渡りて、顔にしみたるこそいみじうをかしけれ。九月晦、十月朔の程の空打曇りたるに、風のいたう吹くに、黄なる木の葉どものほろほると零れ落つる、いと哀れなり。櫻の葉、棕の葉などこそおつれ。十月ばかりに木立多かる所の庭は、いとめてたし。野分の又の日こそいみじう哀れに覺ゆれ。立部透垣など

一梅子下三根ハレハシ
リヨヤ雨ヨリナリ

前栽

思はずなり

の伏しなみたるに、前栽ども心苦しげなり。大きな木ども倒れ、枝など吹折られたるに、惜しきに、萩、女郎花などの上に、よるほひはひ伏せる、いと思はずなり。格子のつぼなどに、さと際を殊更にしたらんやりに、こまぐらと吹入りたるこそ、荒かりつる風のしわざとも覺えね。——枕草子による。

一一 自然と色彩

其の一

松本亦太郎

太陽の光線が、直接或は間接に自然の事物に當り、それから反射した光線が、我々の眼底を刺戟すると、其の時始めて自然界の色彩が現れる。物理學者は色彩はエーテルの波動であると説くが、波には長さの變化と幅の變化こそあれ、色彩の區別は無い。色彩はエーテルの波動に應ずる心の所産

[Eher.]

表情

であつて、直ちに心の現象とはいはれないが、心を離れて色彩は現れるもので無いから、一方からいへば、自然界の色彩は、我が心の反映したものと謂ふことも出来る。自然の色彩に様々の表情の存するは、畢竟それが心の所産であるからである。

自然界に現れる色彩は千差萬別であるが、之に對する心持の方から見ると、すべての色彩をまづ二つに大別するところが出来る。即ち温暖の心持を生ずる色彩と、寒冷の心持を生ずる色彩とであつて、畫家は之を温暖色及び寒冷色と稱へて居る。

寒冷色の中心は青であつて、青に近似の色は、青緑から紺青に至るまで、皆涼しい心持を生ずる。温暖色の中心は橙黄

であつて、之に近似の色は、暗赤色から黄緑に至るまで、皆暖な心持を生ずる。

日本や伊太利あたりでは、晴天には大空は青々として眞に美しい。然るに何れの國民も、斯る青々とした空を戴いて居るといふ譯にいかない。北歐諸國では、晴れて居る時でも空氣が透明で無く、空は灰色になつて居る。勿論多少の青みはあるが、*牙えく*とした青色では無い。鉛の様な色をしてゐる。随つて晝でも、夜でも、天體の光が朦朧としてゐる。我々日本人は、伊太利の風色を餘り美しいとは思はないけれども、北歐の人が伊太利の自然を讚美して已まないのは、彼等が日常青天白日の美を見る事が稀だからである。空の青く見えるのは、空氣の中を日光が透る爲である。遠山の青いの

も、重疊した空氣を透して山を見るが爲である。青は浮動の心持を生ずるから、山も遠くなると輕妙に見える。大空の色は飽和の度の強い青では無い。濃い青を日光を以て薄くしたのである。あの淡青、即ち空色は靜かな色であるが、喜悅の色である。最も濃い青は深い海の表面に於て之を見るを得る。それは即ち紺青である。

太平洋、印度洋上の航海は、紺青の波の上を渡り行くのであるが、極めて濃厚な紺青は、其の深さ一萬七八千呎もある大洋の水面に於て發見することができる。紺青の水より雪白の波の花の咲くのも不思議であるが、咲いた花が忽ちに紺青に染められて、雪白と紺青との争は限りもなく繰返されて、両色彩の活躍する状態は、甚だ目覺しく、航海中の一つの

Juzern.

慰である。紺青は如何にも美しいけれど、沈鬱の趣があつて、一種の凄味がある。希臘の内海や伊太利の沿岸の水の如く、海が浅くなれば、紺青は稍淡くなつて、瑠璃の寶玉を液化したごとく爽快になり、更に瑞西の山間(一)ルツェルンの湖水となれば、藍青は緑を帯びて、恰も翡翠の玉を水に化した如くになつて、色は静かだが、沈鬱の趣は薄くなる。萊因川の上流などになると、緑色は益勝つて、青色を壓するに至る。尤も河の水は礦物性或は植物性の溶解物があつて、種々に着色せられるが概して水は深いから浅いに移るにつれて、紺青から青を経て、緑に移るのである。人間は眼界が狭く、一局部のものしか見ない。而も其の局部には種々な色が現れて居るが、地球の表面の大部分を形成して居る水の色が青であり、

主調

而して又天空の色が青であるのだから、天地の色は青が主調になつてゐると言はなければならぬ。空の見える處、水の動く處、人間の心を沈靜させる働が斷えず行はれて居る。花の中にもあやめ、紫陽花、あめふり草、野生の朝顔など、何れも涼しく、靜かに人の心を休息させる色である。

寒冷色の青と正反對なのは橙黄色である。これは暖い色であると共に、人の心を大いに發揚させる。太陽から發射する色は、最も光輝ある橙黄色である。秋の夕陽が西山に没しよるとする際の空の色は、太陽から出る黄金色の本性を最もよく發揮する。例へば東海道で見る富士の背後に日の没する際や、京都の愛宕山の後に日の入らうとする時の空は、全く金箔の空と化し、山岳の碧色と相對比して、其の見榮が

(1) Sinai.
紅海の北海岸
にシナイ半島に
在リ。

(2) Jhova.

(3) Israel.

(4) Athens.

一層である。私の心に最も強い印象を残したのは、紅海の上から眺めた⁽¹⁾シナイ山の夕陽の景色であつた。シナイ山は絶頂から黄金の光を浴び、山の中腹に懸つた雲は、黄金の神火が燃える如くに見え、莊嚴いはん方なく、炎の中にエホバの聲が聞えたとか、暗中火の柱が立つて⁽²⁾イスラエルの民の沙漠旅行を先導したとかいふやうな猶太の神話は、あゝいふ景色から湧出したのではあるまいかと思はれた。太陽の光線も、日本ではさまざま強烈ではないが、希臘の⁽³⁾雅典附近の夏の太陽といつたら、朝から偉い光輝を放つて、其の光が大理石質の地面に反射する時は、眼に痛みを覚える。煤色の眼鏡を掛けずに、雅典附近を旅行するのは、眼の爲に危険であるといはれて居る位である。希臘神話で、太陽の光線をアポロ

の射出す矢であるとしたのも、成程と合點せられる。

太陽の光が月や星に反映する時は、餘程趣の違つた色が出る。太陽は吾人の眼に映ずる限りに於ては、熱烈な黄金色となるが、月に映じた時は柔く、幾分冷かな色になる。地平を出る時の月は空氣の汚濁してゐる爲、銅色を帯びて居るが、段々高くなつたのを、澄渡つた空氣に透して見ると、空氣の青色が加つて來る爲に、月は黄金に銀を混じた如く、稍蒼白になり、冷靜の趣を生じ、人をして沈思せしめる。天體天象の色としての黄金色は、其の發顯の規模が大きく、種々に人の心を躍動せしめるのであるが、小規模に於ては、地上の花鳥の色となつて人を樂しませる。冬の蜜柑畑、春の菜種畑は何人が眺めても怡悅を感ずる。其の他、⁽⁴⁾連翹、山吹、月見草、黃菊、水

仙の類、四季の花として、いづれも優しい懐かしい趣がある。南瓜、胡瓜の花は胡蝶の舞ふ姿と共に野趣があつて面白い。

一三 自然と色彩 其の二

紫紺と橙黄との中間に位して居るのが、緑色及び其の附近の色である。緑色は寒暄相和し、興奮沈靜相合し、所謂折衷的の性質を有する色である。地上に於ける非情の生物の有する特色であつて、天には無い色である。人間がいつまで眺めて居つても飽きない色は緑である。嫩草や、若葉は大抵帯緑黄色で始るが、目を経るに隨ひ、緑色となり、終には暗緑色となる。佛蘭西あたりでは、夏の盛でも木の葉は帶黄緑色で、柔く生々しいが、日本や英國では木の葉は忽ち暗緑色とな

寒暄

(一)東京上野。

(二)嵐山。

り、自然の景色が硬くなる。若葉の萌出るときは、誠に美しい。氣が舒び、する。五月初の若葉の景色は、四月初の花の景色よりも、實は遙かに趣が深い。東台(一)の新緑、京都東山の新緑、宇治の新緑、嵐峽(二)の新緑を訪うて、楽しむ人の割合に少いのは、花見客の多數が、自然の風色を楽しむ心をもつて居らぬ事を示して居る。眞に花の色を楽しむ人なら、新緑にも樹下に大騒をしてよい筈である。佛獨あたりでは、花に對しては餘り騒がないが、森林の色を楽しむ事は、隨分盛である。巴里のボア・ド・ブーロ(一)の初夏の滴る如き新緑が、都人士の心を引附ける事は、實に大なるものでなる。フイנגステンは新緑の到來を祝する祭である。又英國や米國では、面積の廣大な芝生を造る事が實に巧で、其の國民が綠色趣味に富ん

(1)Bois de Boulogne.

(2)Palingsten.
聖靈降臨祭。
(復活祭の後
五十日)

て居る事をよく示して居る。日本の三都の中で、市街に樹木の最も多いのは東京である。殊に高臺の光景からいへば、東京は樹木の都と謂つてもよい。京都の周圍には美麗な山色はあるが、御苑を除いては、市中には樹木は乏しい。大阪は市の内外共に樹木は甚だ少い。工業の都會が自然と隔絶するは已むを得ないが、自然から餘り隔離すると、人の心は俗化する。大都會に樹林鬱蒼たる大公園を現出せしめる事は、都人士の心身に極めて健全な感化を與へるものである。

暖い色と寒い色との中間に介在して居る點に於て、緑と關係が似て居るが、色の性質に於て之と正反對になつて居るのは紫の色である。紫は太陽の分光色中にはないが、自然の花の色としては可なり澤山にある。紫の中で、紺青に近い

ものと、赤に近いものがある。牡丹、芍薬、躑躅などの花は赤に近い方で、杜若、菖蒲、菫、藤などの花は紺青に近い。木蓮の花はちやうど桔梗と赤との中間にある。人間に培養せられた朝顔の色は差別も甚だ多いが、大抵赤と青との中間に變化して、紫のものが最も多數を占める。總じて紫の色は人を興奮させると同時に、人を沈靜させる。派手なるが如く、おとなしきが如く、両様の趣が備つて居る爲、人を悩ます色である。薄紫になると、優美の情趣が加つて來る。紫色に光輝が加ると莊嚴な色になる。ゲーテは「神がすべての人に審判を下す世界の末日の色は、必ず紫色であらう。」と言つたのは、其の莊嚴の趣から考へたものであらう。ヴィクトリア女皇は紫を好み、女皇の大葬の日は、倫敦市中紫の幕で張詰められた。紫

は王者の色と謂ふ事も出来る。

色の中で、人の心を最も強く興奮させるのは赤い色である。緑は非情の生物が外面に發顯する色であるが、赤は有情の生物の身體内に流動する重なる色である。然し赤は又天象の色として、或は植物の色として、頗る著しい色である。火山が爆發して天に火の柱を立てる時などは、赤も随分凄じいものになる。何人も知つて居るのは、夕焼の現象である。夕焼は空や雲が赤くなるのであるが、夕焼の中、一種特別のものがある。私は曾て瑞西の山奥(一)ミュルレンといふ所に、夏旅行をしたことがあつた。谷を隔て、前面には(二)ユングフラウ山が永久の雪を被り、山腹の所々に永河がある。日没して四面暗くなる頃、時とすると、地平線下の太陽が此のユングフラ

Marion.

Jungfrau.

ウの雪を照すことがある。其の時は暗の空に眞紅の山嶽が現れ、實に莊嚴の趣がある。山が紅になると、對比の働によつて、背景の空が暗青色に見え、山の紅は益、鮮になる。これはアルプ山の紅潮と唱へて、有名な現象であるが、天氣の工合が餘程よくないと、容易に見られない光景であつて、自然界に於ける赤色の發顯として、頗る大規模のものである。

通例地上に於て眺めることの出来る赤い風色は、秋の紅葉である。碓氷峠、日光山あたりの紅葉は、滿山燃えるが如くなつて美しい。京都附近の紅葉も、色が冴えて随分美しいが、箱庭的の小風色が多い。私は或年の十月の初に、(一)ロッキーマウンテンの紅葉を見た事があつた。ロッキーマウンテンには、それこそ實に大きい山が突兀として天に聳え、雪を戴いて、氷河などが流

Rocky mountains.
米國の西部を
南北に連亘す
る大山脈。

れて居る。裾の山々溪々の木の葉は眼の達する限り紅に染められ、汽車は幾ら走つても紅葉は容易に盡きなかつた。而して處々清流激湍があつて、實に美しかつた。

花として咲出づる紅は淡紅のものが多し。深紅は濃厚に過ぎて、之を廣い面積に擴げると、比較的味が乏しくなるが、淡紅となると、喜悅の情があつて、味が深くなる。櫻の花でも、桃の花でも、紫雲英の花でも、櫻草でも、民衆の狂喜するのは皆淡紅である。尤も小さい花なら深紅でもよい。罌粟の花とか、ダリーヤの花とかいふ様なものは美しい。牡丹なども一輪深紅で咲いて居るのは見榮のするものである。

— 渡り鳥日記 —

一四 我が國の繪畫

藤岡作太郎

日本畫と西洋畫とは漸次混融して、其の區劃も明瞭ならざるに至るが如しといへども、此の兩者の純粹なるものを比較すれば、各自の特色は尙甚だ顯著なり。嘗に絹紙と彩具との相違のみならんや、其の用意筆法等に於て皆然り。彼にあつては藝術は科學と並行し、理性は想像の銜となりて、遠近、明暗つとめて自然に背かざらんことを期し、此にあつては文化の精神的方面、獨りまづ進み、筆を揮ふもの感興に乗じて、腦裏の印象を瀉ぎ出す。彼は色彩を旨とし、此は描線を重んじ、彼は實相の通りに空氣の色をも漏すことなく、此は主體の外は生地の儘に存す。一は濃艶、一は瀟洒。一は輪奐たる樓臺に顯官が客を引く如く、一は幽閑なる茅屋に高士が

理性は想像の銜

腦裏の印象

瀟洒
輪奐

梅を愛するに似たり。これらの差別は、蓋し其の初よりして然りしにあらず、各自獨立したる歴史が漸次に養成したるものにして、今はた兩洋交通の歴史によりて、これを合一せんとする傾向あるなり。

我が國の文藝に於ける佛教の感化の甚深なることは、多言を要せず、眞の美術の歴史といふは聖德太子の佛教興隆に始り、爾來進歩劇甚、以て偉大なる奈良朝に及べり。されど此の時代も、彫塑に於てこそ千古無比の名を博すべけれ、繪畫の歩調は未だ之に伴はず、平安朝に巨勢金岡が出てし頃より、漸く丹青全盛の世は來れるなり。而して奈良朝の彫塑がなべて佛像なるが如く、平安朝の繪畫も概して佛畫の外に出でず。按ふに平安朝の如く形式美を偏重したる時代

彫塑

形式美

形相
(一)承暦元年(一七三七)白河天皇創建、足利氏の末の世に廢滅。

七寶莊嚴

(一)山城國宇治に在り。

轉讀



吉祥天女 (藥師寺藏)

は、他に類例を見ず、佛教も亦形相の具足によりて、内心の信仰に近づくべしとしたり。法成寺、法勝寺の如き、今廢墟をだに存せざれども、金堂講堂七寶莊嚴、天を摩する大塔、虹と曳く廻廊、すべて一代の工を盡し、状態は、歴史の傳ふるところ。今に存する鳳凰堂を見ても、其の一端を覗ふべし。香煙除に薰じて、幢幡を掠め、蓮華頻に散つて、轉讀にたぐふ。龍頭の舟は池上に浮んで、笙鼓月に牙え、頻伽の袖は庭前に翻りて、舞容風に堪へ

紫雲の來迎

ず。恰もこれ坐ながらなる極樂淨土、紫雲の來迎を待たずして、身は既に汚濁世界を離る。かくの如き場に用ふる畫像なれば、彩華炫耀、丹碧映射、其の色は珊瑚水晶を碎き、其の線は



雪舟畫像

黄金の箔を切り、或は慈悲圓滿、或は忿怒破邪、十分に濃く、あくまで鮮に、精を窮め微を聞きて、後世の乾枯洒脫なるものとは全く選を殊にしたること、想見するに足れり。

鎌倉時代の繪卷物もまた日本繪畫の精華なり。平治物語繪卷等は源平鬭争の慘狀を寫し、圓光大師畫傳等(一)は新佛敎勃興の機運に従ふ。いづれも時代の反映にして、又不朽の逸

(一)現存三卷。住吉慶恩畫がき藤原家隆詞書すといふ。
(二)四十八卷。古調畫がき林觀雪竹書す。

(一)畫僧。名は等楊。備中の入道。明し。山口朝後周防の雲谷寺に住む。永正三年(二)六六〇年八十七。歿。

提擲 香茶の技

結跏趺坐

教外別傳

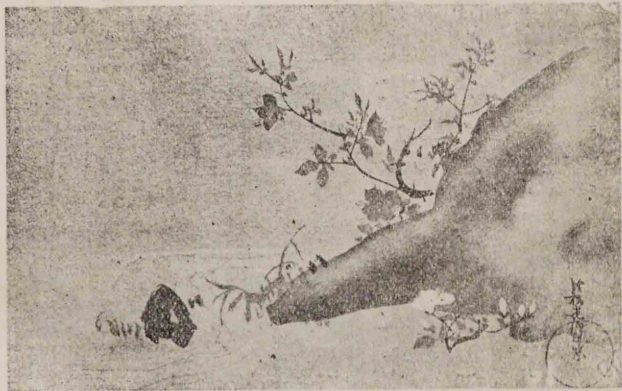
以心傳心

蒼枯 恬澹 破墨 一掃

品たるを失はざれども、内容外形共に根本の變化を受けたるは、實に東山時代の繪畫にして、僧雪舟(一)其の代表者たり。此の革新は禪宗の提擲によりて成り、鎌倉時代に此の宗の傳來せしより漸く養ひ來れる勢力の、こゝに頂點に達したるものにして、香茶の技と榮枯を共にせり。抑平安朝の佛寺を去つて禪刹の門をくゞるや、彼此別天地の感なくんばあらず。結跏趺坐して寂靜の境に入れば、物の美醜も目を遮らず。一旦其の道に悟入すれば、經典佛像何の要かあらん。教外別傳といひ、以心傳心といひ、精神を主として形體に泥まず。例へば能樂に何等の背景を設けずして、しかも能く雲煙萬里の情趣を偲ばしむるが如し。繪畫もこれに同じく、色を棄てて筆に託し、巧を抛ちて氣を驅り、蒼枯にして恬澹、破墨一掃

流風餘韻

(一)狩野正信に起り元信の大成せる一派。
(二)土佐派の一派。鎌倉時代の住吉覺恩に起ると傳ふ。



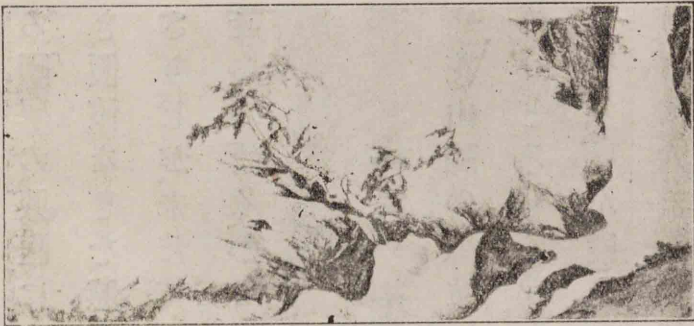
(圖 躡 躡) 筆 珠 光

して遠山を産み、秃筆數行にして樹石を刻む。一見すれば兒戲、熟視すれば神工、ますく、味はうてますく、趣あり。恍惚として吾我を忘る。即ちこれ東山時代の特色にして、流風餘韻延いて近代に及べり。
桃山時代は豪華の氣一世を蓋ひ、繪畫もやゝ移りて雄大穠麗の風を喜びしといへども、いまだ東山の根據を衝くに及ばざりき。江戸時代に至つて、幕府が消極の方針は、更に其の規模を縮めて枯淡の域に歸らしめ、門閥の貴に誇れる狩野^(一)、住吉^(二)も先人

先人の糟粕を嘗む

(一)尾形光琳。京都の人。享保元年(一七二六)歿。年七十四。
(二)英一蝶。大阪の人。享保九年(一七三三)歿。年七十三。
(三)安房の人。號友竹。正徳四年(一七二四)歿。年七十七。
(四)池野大雅。匠氣第一義。

(五)圓山應舉。丹波の人。寛政七年(一七九五)歿。年六十三。
(六)田中納言。京都の人。文政六年(一八二四)歿。



(圖 湍 奔) 筆 舉 應 山 圓

の糟粕を嘗むるのみ。元祿の盛時には、裝飾に傾ける光琳^(一)、滑稽の才ある一蝶^(二)あり、菱川師宣^(三)以來の浮世繪が時世粧を寫して、山水花鳥以外に題目を求めたるは、最も注意すべしと雖も、鄙俗に流れて、遂に高尚なる趣味に應ずる能はず^(四)。大雅等の文人畫は、東山の繪畫に比するに、全然別種のものに屬すれど、匠氣を忌み、形似を疎にし、氣韻生動を第一義とする所は即ち相似たり。應舉^(五)等の寫生畫は自然の摸寫に力めて、別に一流を立てたるものなれども、亦清淡洒脫の習を脱するを得ず。訥言^(六)が創めた

(一) 菊池容齋。名は武保。明治十一年歿。九十一。年

大鏡

大鏡
文鏡秘府論
三國記
大鏡
大鏡
大鏡
大鏡

る土佐古風、容齋(一)が好める歴史畫の如きは、即ち學界に於ける國學の興隆に齊しく、又時勢の反響なり。但し此は彼の如き價值なきを憾とするのみ。一派又一派、各盛衰の數を免れざりしが、未だ其の間に崛起して斯道の根本的革新に成功せる者なく、かゝる裡に明治昭代は來れり。 — 東園遺稿 —

一五 御堂關白

花山院(二)の御時に、五月下つ闇に五月雨も過ぎて、いとおどろおどろしくかきみだれ雨のふる夜、帝さうくしくや思し召しけん、殿上に出でさせおはしまして、遊びおはしましけるに、人々御物語などし給ひて、昔恐ろしかりける事どもなど申させ給へるに、「今宵こそいとむづかしげなる夜なめ

けしき覺ゆ

(一) 藤原道隆。
さる所おは
します

(二) 藤原道隆。
道長の長兄。

(三) 藤原道兼。
道長の仲兄。

便なき事

れ。かく人がちなるにだに、けしき覺ゆ。まして物離れたる所などいかならん。さあらん所に一人いなんや」と仰せられけるに、「え罷らじ」とのみ申し給ひけるを、入道殿は、「いづくなりとも罷りなん」と申し給ひければ、さる所おはします帝にて、「いと興あることなり。さらば行け。道隆は豊樂院、道兼は仁壽殿(三)の塗籠、道長は大極殿へ行け」と仰せられければ、よその君達は便なき事をも奏してけるかなと思ふ。又承らせ給へる殿原は御氣色變りて、益なしと思したるに、入道殿はつゆさる御氣色もなく、私の従者をば具し候はじ。此の陣の吉上(四)まれ、瀧口まれ一人昭慶門まで送れと仰言たべ。それより内には、一人入り侍らんと申し給へば、證なき事にこそ」と仰せらるれば、「げに」とて、御手箱におかせ給へる刀申して立ち給

にがむにが

子四つ

(一)道隆

すぢなし
(二)道兼

ひぬ。今二所もにがむく、おのく、おはしましぬ。
 子四つと奏して、かく仰せられ議する程に、丑にもなりに
 けん、道隆は右衛門の陣より出てよ。道長は承明門より出て
 よ。とそれを分たせ給へば、しかおはしましあへるに、中關白
 殿、陣まで念じておはしたるに、宴の松原の程に、其の者とも
 なき聲どもの聞ゆるに、すぢなくて歸り給ふ。栗田殿は露臺
 の外まで、わななくわななくおはしたるに、仁壽殿の東面の
 砌の程に、簷とひとしき人のあるやうに見え給ひければ、も
 のも覺えて、身の候は、こそ、仰言も承らめ。とて、各立歸り參
 り給へれば、御扇をたゝきて笑はせ給ふに、入道殿はいと久
 しう見えさせ給はぬを、いかゞと思し召す程に、ぞいとさり
 げなく事にもあらずげにて、參らせ給へる。いかに、いかに。と

問はせ絡へば、いとのどやかに、御刀に削られたるものを取
 具して奉らせ絡ふに、こは何ぞ。と仰せらるれば、たゞにて歸
 り參りてはべらんは、證さぶらふまじきによりて、高御座の
 南表の柱のもとを削り候なり。とつれなく申し給ふに、いと
 あさましう思し召さる。こと殿達の御氣色は今にも直らで、
 此の殿のかくて參り給へるを、帝より始め感じの、しられ
 給へど、羨ましきにや、又いかなるにか、物もいはでぞ候ひ給
 ひける。猶疑はしく思し召されければ、つとめて藏人して、削
 り屑を遣はして見よ。と仰言ありければ、もて行きて、おしつ
 けて見たらうびけるに、つゆ違はざりけり。其の削跡はいさけ
 ざやかにて待るめり。末の世にも見る人は尙あさましき事
 にぞ申し、かし。

けざやか

一六 法成寺造營

(一)法成寺。
(二)藤原頼通。
(三)道長。

今は御心地例さまになり果てさせ給ひぬれば、御堂の事
思し急がせ給ふ。攝政殿國々までさるべき公事をばさるも
のにて、まづ此の御堂の事を先につかうまつるべき仰言の
たまふ。殿の御前も、此の度生きたるは別事ならず、此の願の
叶ふべきなめりと、のたまはせて、他事なくたゞ御堂におは
します。方四町をこめて大垣にして、瓦葺きたり。様々に思し
おきて急がせ給へば、夜の明くるも心許なく、日の暮るゝも
口惜しう思されて、夜もすがらは、山を疊むべきやう、池を掘
るべきやう、木を栽ゑなめさせ、さるべき御堂々々、方々様々
造りつゞけ、御佛はなべての様にやはおはします。丈六の金
色の佛を、數もしらず作りなべ、そなたをば北南と馬道をあ

馬道
大
自
運

安きいも大
殿ごもらず

けて、道を整へ造らせ給ひて、廊、渡殿かず多く作らせなんど
思し給ふに、鶏の鳴くも久しく思され、宵曉の御行も怠らず
安きいも大殿ごもらず、唯此の御堂の事のみ、深く御心にし
ませ給へり。

御封
御莊
夫
地子官物

日々に多くの人々参り罷て立ちこむ。さるべき殿原をは
じめ奉りて、宮々の御封、御莊どもより、一日に五六百人千人
の夫どもを奉るにも、人の數多かることをば、かしこきこと
に思したり。國々の守ども、地子官物はおそなはれども、只今
は此の御堂の夫役、材木、檜皮、瓦など多く参らする事を、我も
我もと競ひつかうまつる。大方近きも遠きも参りこみて、品
品方々、あたりくにつかうまつる。
或所を見れば、御佛つかうまつるとて、佛師ども百人ばか

封
御封
御莊
夫
地子官物
御封
御莊
夫
地子官物

えつせおと

り並みゐてつかうまつる。同じくはこれこそめてたけれと見ゆ。御堂の上を見上ぐれば、工匠ども二三百人のほりゐて、大きなる木どもには大綱をつけて、聲を合せてえさまさと引上げさわぐ。御堂の中を見れば、佛の御座作りかゝやかす。板敷を見れば、木賊、椋の葉などして、四五十人手毎に並居て磨き拭ふ。檜皮葺、壁塗、瓦作なども敷をつくしたり。又年老いたる翁などの、三尺ばかりなる石を、心に任せて切りとゝのふるものあり。池を掘るとて四五百人おりたち、山を疊むとて五六百人のほりたち、又大路の方を見れば、力車にえもいはぬ大木どもに綱をつけて、叫びのゝしりて引きもてのほる。鴨川の方を見れば、筏といふものに舟材木を入れて、棹こして心地よげに謠ひのゝしりて上るめり。大津、梅津の心地

するも、西は東といふことはこれなりけりと見ゆ。磐石といふばかりの石を、はかなき筏にのせて率て來たれど沈まず。すべて色々様々いひつくし、まねびやるべき方なし。かの須達長者の祇園精舍作りけんも、かくやありけんと思ゆるを、冬の室、夏の風、各ことごととなり。

かゝる御勢にそへて入道せさせ給ひて後は、いとゞ勝らせ給へりと見えさせ給ふにも、猶なべてならざりける御有様かなと、近う見奉る人は尊み、遠う見奉る人は遙かに拜み参らす。今は此の御堂のあたりの木草ともならんと思へる人のみ多かりき。そなたさまに赴けば、海の浪もやはらかにたちて、此の御堂のものを持て運ばせ、河も水すみて、快く浮べても参ると見ゆ。なほなべて、概此の世の事とは見えさせ給

はずまづは、先年に長谷寺にある僧の、御祈禱をいみじうして寝たりける夢に、大きにかめしき男の出で来て、何かかく殿の御事をばともかくも申し給ふ。弘法大師の、佛法興隆の爲に生れ給へるなり。とぞ見えさせ給ひける。又天王寺の聖徳太子の御日記には、王城より東に、佛法弘めん人を我と知れ。とこそは書置せ給ふなれ。いづれにてもおろかならぬ御事なり。

— 榮華物語 —

一七 萬葉集の歌

一 長歌

吉野宮に幸ませる時

安見し、

安見し、吾が大君、

柿本人麿

神ながら神さびせすと、

吉野川瀧つ河内に、

上り立ち國見をすれば、

山神ヤマカミの奉る御調と、

秋立てば紅葉かざせり、

大御食に仕へまつると、

下つ瀬に小網こあみさし渡す、

神の御代かも。

高殿を高知りまして、

たくなたくなはる青垣山の、

春べは花かざし持ち、

ゆふ川の神も、

上つ瀬に鵜川を立て、

山川も依りて仕ふる

反歌

山川もよりて仕ふる神ながら

たぎつ河内に船出せすかも

聖武天皇紀伊國に行幸し給ひし時

山部 赤人

山部 赤人

はるの野に葦摘みにと來しあれぞ

野をなつかしみ一夜ねにける

笠 金 村

もののふの臣の男子は大君の

まけのまにマニ聞くといふものぞ

大伴 家持

ますらをは名をし立つべし後の世に

聞きつぐ人も語りつぐがね

春の野に霞たなびきうらがなし

このゆふかげに鶯鳴くも

一八 古文學に見えた祖元の面影

奈良朝以前の重なる文學は、古事記、日本紀の中に在る百八十餘首の歌と、延喜式の中に在る祝詞とである。祝詞は神に祈る詞であるが、其の中最も文學的價值のあるものは、大祓詞と祈年祭詞であらう。祝詞を見ると、我が國民が罪穢を忌み、清く直きを愛した事、神を敬ひ平和を愛した事が解る。古事記、日本紀の歌の例として、たゞ一つ日本武尊が臨終の御歌を引かう。

いのちの 全けん人は、

たゞみごも 平群の山の 隱白禱が葉を、

うづに挿せ 其の子。

これは尊が伊勢の能褒野で薨り給はんとする時、遙かに故

古事記
元朝天皇、和朝三弟、本皇
我皇、伊勢野、伊勢野、伊勢野
伊勢野、伊勢野、伊勢野
日本書紀
神代、伊勢野、伊勢野
伊勢野、伊勢野、伊勢野

郷の大和を思ひやつて歌はれた思國歌である。歌の大意は、「我は今病の爲に、旅の空に寂しく果てるのであるが、それにつけても故郷の汝等を思ふの情に堪へぬ。あはれ故郷の命全く身の健かならん人よ、昔我が汝等と共に取つてかざして遊んだあの平群の山の隠白禱の葉を髪飾として、楽しく遊べよかし。我が愛しむ故郷人よ」といふことであらう。

旅路に悩み、死に臨んで故郷を偲ぶのは、人情の自然で珍しくも無いが、毒氣に中り、恐ろしい苦悶を重ねて死ぬる間に、遙かなる故郷人に語を寄す。命全けん人は、平群の隠白禱をかざし、陽氣に遊んで人生を楽しめかし。といはれた御心持はどうであらう。此の樂天的、積極的、向上的、光明的な勇ましい氣象は、いかにも有難いものでは無いか。此の有難い

氣象、日本民族の積極的、光明性が、佛教などのお蔭で濕つぽく陰性化、消極化せられたかと思ふと、残念でならぬ。

日本武尊はいろくゝな點で、大和民族の固有性を備へて居られた方であつた。性質は極めて聰明で、そして武勇は絶倫であつた。熱したら矢も楯もたまらぬ多血性で、兄君を掴みひしいて、薦に包んで投棄するといふ亂暴をされるが、それであつて、君父の命には従ふといふ優しい所があつた。東西の兇賊を手も無く平げられる武勇があつて、それで姿はいふと、女装すれば川上梟帥の目をも欺く美容があつた。人を信じて、群がる夷の間に直登して火攻に逢ふ。劔で其の火を薙返して夷を鑿にする。伊勢では熊襲を漸く平げた私に、すぐ蝦夷征伐の勅命のあるのは、父帝が死ねよとの御心で

ありませうか」と叔母命に泣いて語られたが、やがて涙ををさめて夷を平げられる。死なうといふ間際に、達者な人は遊び樂しめと勧められる。色々な積極的性質の面白く調和した趣、實に愉快な御性格ではあるまいか。

日本武尊は世に在した時は、自ら「吾が心常には空よりも翔り行かんと思ふ」といはれたが、薨れまして後は、白鳥となつて、威勢よく美しく天に翔つて行かれたと申すことである。隠白禱に白鳥。私は此の二つが大和民族の堅實な性質と、清潔、優美を愛する性質と、足許を固める着實性と、高きに憧るゝ向上心とを表す標章として、實にふさはしいものと思ひ、而して之が日本武尊といふ上代の代表的英傑に繋がつてゐる事を面白く思ふ。日本の國民性が凝固つて、日本武尊

となつたのでは無いかと思ふ。

次に奈良朝の文學を代表すべき作物は、古事記と萬葉集とである。古事記は神代の大昔から推古天皇に至るまでの言傳を筆記したものである。萬葉集は奈良朝の歌人の作を中心とした上代の歌集である。而して二つ共に昔の日本民族の純なる面影を見るべき古文學の寶典である。古事記の趣を示す一例として、須佐之男命が高天原に上られた時に、天照大御神が命を待ちつけて詰問せられる一節を引かう。

「山川悉に動み、國土皆震りき。こゝに天照大御神聞き驚かして、我が那勢の命の上り來ます由は、必ず善しき心ならじ。我が國を奪はんと欲すにこそと詔り給ひて、即ち御髮を解き、御角髮に纏かして、左右の御角髮にも、御鬘にも、左

右の御手にも、各八尺の勾瓊の五百津の美須麻流の珠を纏持たして、背には千入の鞆を負ひ、比良には五百入の鞆を附け、又いつの竹鞆を取佩ばして、弓腹振立て、堅庭は向股に踏みなづみ、沫雪をす蹴散かして、いつの男建び踏建びて、待問ひ給はく何故上り來ませると問ひ給ひき。大意は、須佐之男命は山川國土を震動させて、天照大御神御領の高天原に上つて來られた。大神は聞し召し驚かせられて、弟の命が恐ろしい權幕で上つて來たのは、きつと善意ではあるまい。察するに我が國を奪はんの下心であらうと仰せられて、早速凜々しき男装に改めさせられ、髪を解いて角髪に結び、左右の御角髪にも、御鬘にも、左右の御手にも、玲瓏燦爛たる勾玉を緒に通したのを纏うて、輝くばかりに装は

せられた。なほ武器には千本入、五百本入の鞆を前後につけ左手の臂には立派な鞆を佩び、弓腹を振立て、堅い庭に向股まで踏みぬかんばかり力足を踏張り、土くれをば沫雪の如く蹴散らかして、御稜威あたりを拂ふ御武者ぶるひゆ、しく、居丈高に立ちほだかつて、命の見ゆるを待ちつけて、何故の入國ぞと問はせられた。といふことである。

土から掘出したやうなうぶな趣と、鐵のやうな強い力と、花のやうな優しい美しさとが、微妙に調和してゐるやうに思はれる。天照大御神の氣高い、勇ましい御姿が、雄壯剛健な大文字の中に、躍動してゐるやうに思はれる。

我等の祖先の面影の古文學に見えた趣は、まづ此の様なものであつた。

—五十嵐力、作文三十三講による—

一九 詩人杜甫

德富猪一郎

(一)唐の詩人。字は子美、少陵と號す。大曆五年(西暦七五〇)歿。年七十九。

杜甫は君國的詩人と稱すべきと同時に、又家庭的詩人なりといふを得べし。彼の全集には、事の國家、帝王、時事に關するもの最も多く、之に次いで、は家族に關するもの多し。人未だ其の國を愛して、其の家を愛せざるものなく、未だ其の君に忠にして、其の家族に無情なるものあらず。彼の眼中には、國は家の擴大せられたるものにして、家は國の縮小せられたるものなり。彼の忠君愛國は抽象的にあらずして、其の妻子弟妹を愛するの情を推及したるものなりき。支那の詩人上は詩經より、下は明清の諸家に至るまで、其の家に多少の詩思を接觸せざるものあらず。されど支那の全史を通じて、未だ彼の如き家庭的詩人を見出す能はざるなり。其の『進艇』

の作を看よ。

南京久客耕南畝。北望傷神坐北牕。晝引老妻乘小艇。晴看稚子浴清江。俱飛蛺蝶元相逐。並蒂芙蓉本自双。茗飲蔗漿攜所便。瓷甕無謝玉爲缸。

(一)支那四川省の首府。

これ成都に於ける浣花草堂生活中の消息なり。其の一家和樂の狀は、千載の下尙活躍す。夫婦小艇に乘じ、稚子清江に浴す。艇上の蛺蝶は俱に飛び、水邊の芙蓉は蒂を並ぶ。先生貧なりと雖も、其の樂み決して貧ならざるなり。人類ありて以來、詩人多からずとせず。然も彼が如き清福を贏得たるもの、それ幾許かある。其の江村卜居の作中句あり、曰く、「老妻畫紙爲棊局。稚子敲針作釣鉤」と。貧家の活計も、此に至りて寧ろ羨むべきを見るなり。若し夫れ彼が『春望』の五律の如き、

贏得

國破山河在。城春草木深。感時花濺淚。恨別鳥驚心。烽火連三月。家書抵萬金。白頭搔更短。渾欲不勝簪。
如何なる鐵石の心腸を有する者も、誦し來りて黯然たらざるものあらじ。詩としても絶調なり。情としても絶調なり。家書抵萬金の一句は、眞に彼の胸奥より湧出でたるなり。同時に『遣興』の



杜甫畫像

詩あり。
驥子好男兒。前年學語時。問知人客姓。誦得老夫詩。世亂憐渠小。家貧仰母慈。鹿門携不遂。雁足繫難期。天地軍麾滿。山河戰

角悲。偷歸免相失。見日敢辭遲。
彼の心は實に此の稚兒に倦々たりしなり。又元日示宗武の作に曰く。
汝啼吾手戰。吾笑汝身長。處處逢五月。迢迢滯遠方。飄零還柏酒。衰病只藜床。訓諭青衿子。名慙白首郎。賦詩猶落筆。獻壽更稱觴。不見江東弟。高歌淚數行。
前詩は至德二載の春、即ち彼が四十五歳の作、後詩は大曆三年の正月元日、即ち彼が五十七歳の作なり。僅かに父の詩を誦するを學ぶ驥子も、今は一個の青年となりぬ。吾人は之を讀んで、如何に彼が其の子に愛着したるかを知るなり。而して又其の同胞に眷々たるかを知るなり。
彼の愛は其の妻子のみならず、實に弟妹に及べり。彼の同

倦々

一九 詩人杜甫

谷縣七歌中の第三首と第四首とは、弟と妹とを題目とせり。
「有弟有妹在遠方。三人各瘦何人強。」と又曰く、有妹有妹在鍾離。
良人早没諸孤癡」と、其の他集中に散見する彼が同胞を懷ふ
の詩、枚舉に遑あらず。彼や眞に家庭的、若しくは家族的詩人
たるに愧ぢざるなり。

——杜甫と彌耳敦——

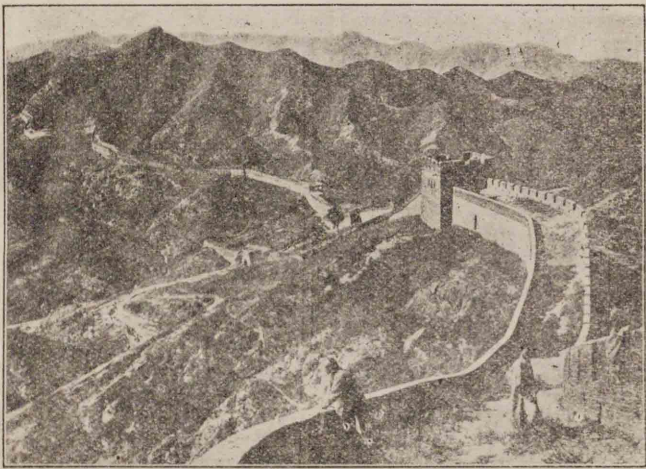
二〇 萬里長城

土井 晚翠

征驂
平蕪

生ける歴史か、數ふれば 齡は高し二千年、
影は萬里の空遠き 名も長城の壁の上。
落日低く、雲淡く、 關山看すく暮れんとす。
征驂悵みとまりて、 俯仰の遊子身はひとり。
絶域花は希ながら、 平蕪の綠今深し。

霸圖



萬里の長城

春朦朧のたゞ中に、

霞まぬ空も無かりけり。
天地の色は老いずして、
人間の世は移ろふを、
歌ふか、高く大空に、
姿は見えぬ夕雲雀。
嗚呼、跡ふりぬ。人去りぬ。
歳は流れぬ。千歳の
昔に返り何の地か、
かれ秦皇の霸圖を見ん。
殘壘破壁聲も無し。
恨も暗し、夕まぐれ、
俯仰の遊子身はひとり。

邦は亡びて邦に次ぎ、人は代りて人を追ふ。

鼎は移る朝二十、歳は流るゝ曆二千。

中華幾たび烽舉り、長城の壁越えきたり、

又越え去りし國民の、數さへいかに世々の跡、

山川影はかはらねど、春夢空しく跡も無し、

群雄の覇圖いたづらに、残すは獨り史上の名。

獨り邊土に影絶えず、齡重ねて二千歳。

殘壘苔に今青む、長城の影たふとしや、

民の膏血、世の笑、虐政の形見それながら、

歴史の色に染められし、萬里の影ぞ懐かしき。

其の面影に忍びてて、泣くに懐古の露のみか。

暮春の恨誰かために、霞も咽ぶ夕まぐれ。

霞も咽ぶ夕まぐれ、遊子俯仰の物思、

北夷禦ぎし長城の、昔の跡はかはらねど、

時世空しく流れては、中華の姿あすいかに。

秦、漢、魏、晋移り行く、昔の跡に引換へて、

西の嵐の吹寄する、黄海の波今あらし。

西曆一千九百年、東亞の嵐あすいかに。

中華の光先王の、道此の民を救ひ得じ。

愛を四海に傳ふべき、神人の教いま空語。

看ずや豺狼の慾飽かて、基督教徒血を啜り、

群羊守る力無く、

異教の民の聲吞むを。

俯仰古今の物思、

遊子の恨いつ盡きん。

征驂悵み嘶ける

響をかへす壁のものと。

思も遠く眺むれば、

霞たゞよふ大空の

自然の樂も絶果てつ。

關山暮れて星出でて、

恨を含む長城の

姿は闇に吞まれ行く。

—曉鐘—

二一 富士の嶺を詠める歌ども

清水濱 臣

富士の高嶺はわが國のしづめともいひ傳へて、異山にす
ぐれたることは、言出でんも今更なることなりや。この山を

詠める古歌、萬葉集よりはじめて、世々の勅撰、私集に入りた
る名歌ども、あげて數へ盡し難し。古はおきていはじ。近く、水
無瀬中納言氏成卿の富士百首といふものあり。世に知る人
なし。近き頃もとめえたるに、

西の海やもろこしさして行く船の

うへにもふじはいくか見るらん

わすれては空にも雪のつもるか

見れば雲間にはるゝ富士の嶺

これにならへる契沖阿闍梨の百首、長流隱士の三十首、いつ
れも珍しく巧によみかなへられたり。縣居翁の長歌殊にた
へにして、人麿、赤人のにも、をさく、劣れりとは見えざあ
る。あがたるの長歌反歌に、

一、下河邊長流。

するがなる富士の高嶺は雷の

音する雲のうへにこそ見れ

ふじの嶺の麓を出でてゆく雲は

足柄山のみねにかゝれり

また紀行の中に、

いつの世のちりみぢよりかなり出でて

ふじははちすの花と見ゆらん

三首ともに秀逸ときこゆ。

また荷田東萬侶大人の歌に、

きゝしよりも思ひしよりも見しよりも

登りてたかき山はふじのね

(一)加藤枝直。

枝直が歌に、

天のはら照る日に近き富士の嶺に

いまでも神代の雪はのこれり

芳宜園の歌に、

はこねぢや神のみさかをこえ來ても

なほふじのねはくもゐなりけり

など、よき歌と人もいひあへり。

(一)村田春海。

わが師の歌に、

心あてに見し白雪はふもとにて

おもはぬ空にはるゝふじのね

この歌さまでの秀逸とも思はざりしに、いにし文化四年、おのれ伊豆のいでゆあみがてら、能坂の里なる竹村茂雄が許に志して旅だてる頃、熱海のいでゆを出でて、弦卷山の頂に

いでゆ

かゝりしに、浮雲西の空にたちかさなりたりしかば、伴なへる人に對ひて、「ふじは何處の雲のあなたにかあたりて見ゆる。」と問ひしに、遙かに指ざして、彼處の雲の中にこそ、「といふ程、いつしか浮雲はれのきけるに、その指ざし教へたる雲よりは、はるかに高く空に聳えて、ふり仰ぎ見るばかりなりしかば、さてその時ぞ、師の歌を思ひ出でて、めできこえたりき。

—泊酒舎文集—

二二 花鳥山水

鶴

藤井高尙

鶴は空高く飛ぶも、翅こそさだかに見えわかね、靜かなるさまいとしるしまして、間近くおりのたは、たとへば、よき

額の限り

人の冠うへのきぬ着て立ちたまへるに似て、いといやんごとなげに見ゆかし、羽衣の雪はづかしく、額の限り紅きを、千年經にけるなりといふは、仙人の數へ知りていひそめけることならんとぞ。

—松屋文集—

花

藤井高尙

春くれば、咲かざりし木草の花もあまた咲きいづる中に、それかれとかずまへいふ限りはさらなり、名も知らぬも、をかしう見ゆるは、をりからなめりあるはいとよく晴れたる朝日の、のどかなる影にほひあひて、ひとときはうつくしうあるは霞める月の影の心にくきに、ほのぼの見ゆるがいひ知らぬなど、あだし時にかからんやは、さるをかしき折に、また類なき櫻の咲きいでたるよ、いかでかはなのめならんと

あだし時

ぞ。

—松屋文集—

蝶

藤井高尙

(一) 支那周代の蒙
の人の孟子と
同時代といふ。
莊子といふ。

莊周が夢のうちを身をかへて胡蝶となりしといへるは、もとよりそら言ながら、をかきふるごととて、昔より歌にも文にもつくりあへり。さるは、胡蝶といふもの、見る目もいと美しく、名さへにくからぬゆゑぞかし。蓑蟲などになりたる夢物語ならば、かからんやは、花園にはじめは三つ四つとかぞふるばかり稀に見えしも、いづくよりか來つらん、あまたになりて、空にとび、木がくれをゆく。あしたには露にぬれて、小さき羽も重きにやあらん、立ちかねて、なほ花びらにすがりて眠りおたるに、風のさと吹きくれば、驚きておのれも亂れ飛び、ゆふべにはねどころを争ふにやあらん、此處、彼處

の花にすだきて、たちおひまなきがをどるやうに見ゆるなど、いとをかし。ましてやんごとなきわたりの前栽の花にすみて、玉簾近くとびありきたらんは、あひあひて、ひたひつきも羽衣も、ひとときはあてに美しうぞ見ゆらんかし。

—松屋文集—

山水のかたかける繪を見て 村田春海

静けき窓の裏、幽かなる燈火の下にひとり居て、よくつれづれ慰むべきものは、畫と書との二つになんありける。下れる世に生れ出でて、上つ世の人を心の友となすべきは、書なり。足は都のうち止りて、ひとの國の遙かなる境をも、たゞに見るべきものは、うつし繪のたくみになんありける。かゝれば、いにしへの書どもくりかへし見る暇には、名だたる山

川のけはひをうつしゑにしひび出でて、こを常に心やりぐ
さとぞなしける。

かくおのが心をおもひはかりて、或人の見よとておこせ
しを見るに、山を疊めること十まり五つ、たゞ墨がきにかき
なしたるが、濃きは近く、薄きは遠し。そのまぢかく見わたさ
るゝは、大木しげく生ひたち、巖こゝら聳えて、道いとさかし
ともさかしく、かしこかる世の經がたきためしにいひけん
からうたのこゝろこそおぼゆれ。又遠く見やらるゝは、ある
かなきかに雲霧たち迷ひて、群れゆく鳥の翅も、末たゞきえ
ぎえなるに、夕日ほのかにほへり。いにしへの書に眉びき
の如しといひけんは、たゞかくぞとまづ想ひ出でぬ。水のな
がれ一すぢ、その源をとむるに、幾千里のをちともわかたず、

李白の蜀道難
のこと。

とむ

はか

又その落ちゆく末を望めば、何處をはかとも知りがたし。そ
の八十瀬の隈には、眞砂いと清らに、さゝら波よる渚あり。又
岩うつ波高くたちて、音きくばかりなるに、舟いたくさしわ
づらへるあり。又岸のまにまに入りまがりて、水淀みて深き
は、そこひも知らぬ淵なるべし。さて水を隔てて麓の方に大
きなる屋ども、薨をつらね、ことごとしき門おしひらきて、前
には石を橋とせり。又水の此方には、あやしき萱屋立ちなら
びて、垣根ゆひわたせり。又こゝかしこに人あり。あるは馬に
騎れるも、あるはかちより行くも、あるは薪負へるも、あるは
釣の竿もたるも、立ちたるも居たるも、老いたるも若きも、そ
のさまいひも盡し難し。まして木草何くれのものは、數へも
あへんやは。かくとほじろき山川の姿を、たゞ一ひらの紙の

あからめ

中に、こまやかに心しらひしたるは、世になき筆の跡とぞいふべき。たゞかくめづらかなるを、いづくの國、いづくの處をいつの世いかなる人のうつし置きけるなりとも、知られぬこそをしけれ。これに對へば、あからめもせずうちまもられて、あくよなけれど、さはいへ、久しくとゞむべきならねばとて、そのおほよそをしるしおきて、かへしやりつ。

— 琴後集 —

二三 おのがものまなびのありしやう

本居宣長

おのれいときなかりし程より、書を讀むことをなん、よろづよりもおもしろく思ひて讀みけるさるは、はかばかしく

(一)寶曆二年宣長
に上りて儒學
を堀景山に學
び、また小兒
科の醫道を武
川幸順に學
ぶ。
(二)小津三右衛
門定利、兵衛
村田孫兵衛、
(三)商の女勝子、
豐

師に就きてわざと學問すともあらず、何とこゝろさすこともなく、そのすぢと定めたるかたもなく、たゞからのやまとの、くさぐさのふみを、あるにまかせ、得るにまかせて、ふるき近きをもいはず、何くれと讀みけるほどに、十七八なりし程より、歌よままほしく思ふ心出で來て、よみはじめけるを、それはた、師に従ひて學べるにもあらず、人に見することなどもせず、たゞひとりよみ出づるばかりなりき。集どもも、古き近きこれかれと見て、かたの如く、今の世のよみざまなりき。かくては^(一)たちあまりなりし程、學問しにとて、京になんのぼりける。さるは、十一のとし、父^(二)におくれしにあはせて、江戸にありし家のなりはひをさへに、失ひたりし程にて、母^(三)なりし人のおもむけにて、くすしのわざをならひ、又そのため

(一)僧契沖著

(二)古今餘材抄
古今和歌集の
注釋書
(三)伊勢物語の注
釋

によつねの儒學をもせんとしてなりけり。さて京に在りし
ほどに、百人一首の改觀抄を人にかりて見て、はじめて契沖
といひし人の説をも知り、そのよにすぐれたる程をも知り
て、この人のあらはしたるもの、餘材抄、勢語臆斷などをはじ
め、その外も、つきつきにもとめ出でて見けるほどに、すべて
歌まなびのすぢのよきあしきけちめをも、やうやうにわき
まへさとりつ。

さるまゝに、今の世の歌よみのおもへるむねは、おほかた
心になはず、その歌のさまも、をかしからずおぼえけれど、
そのかみ、同じ心なる友はなかりければ、たゞ世の人なみに、
此處、彼處の會などにも出でまじらひつゝ、よみありきけり。
さて人のよむふりは、おのが心にはかなはずりけれども、お

のがたててよむふりは、今の世のふりにもそむかねば、人も
咎めずぞありける。そは、さるべきことわりあり、別にいひて
ん。

さて後、國にかへりたりし頃、江戸より上れりし人の、近き
頃出でたりとて冠辭考といふものを見せたるにぞ、縣居大
人の御名をも始めて知りける。かくて、そのふみ、はじめひと
わたり見しには、さらに思ひもかけぬ事のみにして、あまり
こと遠く、あやしきやうに覺えて、さらに信ずる心はあらざ
りしかど、なほあるやうあるべしと思ひて、たちかへり今ひ
と度見れば、まれまれには、げにさもやと覺ゆるふし、ふしも
出で來ければ、又たちかへり見るに、いよいよげにと覺ゆる
こと多くなりて、見る度に信ずる心の出で來つゝ、つひにい

(一)十卷。古典に
あらはれたる
枕詞を五十音
順に排列して
注釋す。
(二)加茂貞淵。

あるやうあ
るべし

にしへぶりの心言葉の、誠に然ることをさとりぬ。かくて後に思ひくらぶれば、かの契沖が萬葉のときごとは、なほいまだしき事のみぞ多かりける。おのが歌まなびのありしやう、大方此の如くなりき。

さて又道のまなびは、先づはじめより、神書といふすぢのもの、古き近き、これやかれやと讀みつるを、はたちばかりの程より、わきてこゝろざしありしかど、とりたてて、わざと學ぶことはなかりしに、京に上りては、わざとも學ばんと、志はすゝみぬるを、かの契沖が歌ぶみの説になずらへて、皇國のいにしへの意をおもふに、世に神道者といふものの説くおもむきは、皆いたく違へりと、はやくさとりぬれば、師とたのむべき人もなかりしほどに、われ、いかで、いにしへのまこと

(一)實曆十三年。
宣長年三十四
歳。
(二)田安中納言宗
武。

のむねを考へ出でんと、思ふ志深かりしにあはせて、かの冠辭考を得て、かへすがへす讀み味はふほどに、いよいよ志深くなりつゝ、この大人を慕ふ心、日にそへてせちなりしに、一年、この大人、田安二の殿の仰せごとを承り給ひて、この伊勢の國より大和、山城など、此處、彼處と尋ねめぐられしことありしをり、この松坂の里にも、二日三日とゞまり給へりしを、さることつゆ知らで、後に聞きて、いみじくくちをしかりしを、かへるさまにもまた一夜やどりたまへるをうかゞひ待ちて、いといと嬉しく、急ぎやどりにまうでて、はじめて見え奉りたりき。さてつひに名簿を奉りて、教をうけたまはることにはなりたりきかし。

—玉がつま—

二四 勅語と壽詞

一

大禮勅語

朕祖宗ノ遺烈ヲ承ク、惟神ノ寶祚ヲ踐ミ、爰ニ即位ノ禮ヲ行ヒ、普ク爾臣民ニ誥ク。

列聖統ヲ紹ク
皇化ヲ宣ヘテ蒼生ヲ撫ス

朕惟フニ、皇祖皇宗國ヲ肇メ、基ヲ建テ、列聖統ヲ紹キ、裕ヲ垂レ、天壤無窮ノ神勅ニ依リテ、萬世一系ノ帝位ヲ傳ヘ、神器ヲ奉シテ八洲ニ臨ミ、皇化ヲ宣ヘテ蒼生ヲ撫ス。爾臣民世世相繼キ忠實公ニ奉ス。義ハ則チ君臣ニシテ、情ハ猶ホ父子ノユトク、以テ萬邦無比ノ國體ヲ成セリ。

皇考

皇考維新ノ盛運ヲ啓キ、開國ノ宏謨ヲ定メ、祖訓ヲ紹述シテ不磨ノ大典ヲ布キ、皇圖ヲ恢弘シテ曠古ノ偉業ヲ樹ツ。聖

德四表ニ光被シ、仁澤遐陬ニ霑洽ス。

光被
仁澤遐陬ニ
霑洽ス
丕績ヲ續ク

照鑑上ニ在リ

朕今丕績ヲ續キ、遺範ニ遵ヒ、内ハ邦基ヲ固クシテ永ク磐石ノ安ヲ圖リ、外ハ國交ヲ敦クシテ共ニ和平ノ慶ニ賴ラムトス。朕カ祖宗ニ負フ所極メテ重シ。祖宗ノ神靈照鑑上ニ在リ。朕夙夜兢業天職ヲ全クセムコトヲ期ス。朕ハ爾臣民ノ、忠誠其ノ分ヲ守リ、勵精其ノ業ニ從ヒ、以テ皇運ヲ扶翼スルコトヲ知ル。庶幾クハ心ヲ同クシ、力ヲ戮セ、倍國光ヲ顯揚セムコトヲ。爾臣民其レ克ク朕カ意ヲ體セヨ。

二

大禮壽詞

臣重信謹ミテ言ス。伏シテ以ミルニ、陛下萬世一系ノ寶祚ヲ踐ミ、乾綱ヲ攬リテ坤維ヲ總ヘ、爰

乾綱
坤維

ニ天津高御座ニ昇御シ、即位ノ大禮ヲ行ヒ給フ。遠邇瞻仰シ、億兆抃舞ス。臣重信誠懽喜頓首頓首。伏シテ惟ミルニ、皇祖天壤無窮ノ神勅ヲ、皇孫ニ錫ヒテ、八洲ニ君臨セシメ、三種ノ神器ヲ親授シテ、五部ノ神ヲ臣事セシメ給フ。萬世不易ノ皇基確然トシテ爰ニ定マル。

皇宗英武聖明

皇祖授國ノ宸意ヲ體シ、天業ヲ恢弘セムトシ、皇師ヲ帥キテ中州ヲ平定シ、皇位ニ即キテ萬機ヲ親裁シ、大ニ經綸ヲ行ヒ、洪範ヲ後聖ニ貽シ給フ。而シテ皇孫ニ奉事セシ諸部ノ子孫亦咸先志ヲ繼キテ皇謨ヲ翼賛ス。億載一統ノ皇業蔚爾トシテ維レ崇シ。

洪範
皇謨

先帝登極ノ初、復古ノ廟策ヲ定メテ維新ノ皇圖ヲ啓キ、開

黎元

國ノ鴻猷ヲ宣ヘテ萬邦ノ善長ヲ採リ、藩封ノ舊制ヲ廢シテ一途ノ治化ヲ施シ、不磨ノ大典ヲ布キテ立憲ノ政揆ヲ明ニシ、兵制ヲ建定シテ陸海ノ戎備ヲ嚴整シ、文教ヲ闡敷シテ黎元ノ智德ヲ啓養シ、産業ヲ殖興シテ厚生ノ道ヲ擴メ、制度ヲ釐革シテ庶政ノ規ヲ宏ニシ給フ。是ニ於テ乎國家ノ綱紀廓如トシテ光張シ、邦運ノ旺盛駸駸トシテ止マス。

陛下 大統ヲ承ケ、懿績ヲ續キ給ヒ、

皇祖 皇宗暨 列聖ノ宏謨ニ遵ヒ、丕基ヲ鞏固ニシ、德光ヲ宣揚シテ天職ヲ全クセムトシ、宵衣旰食、聖衷ヲ勞シ給フ。今大禮ノ吉辰ニ方リ、明詔ヲ下シテ肇國ノ大本ヲ申明シ、臣子ノ恒道ヲ提誨シ給フ。臣等感激已ム無シ。伏シテ見ミルニ、

陛下仁孝恭儉ノ天資ヲ以テ至隆ノ治ヲ圖リ給フ。

皇祖 皇宗暨 列聖ノ神祐

陛下ノ聖躬ニ在リ、皇業愈昌ニシテ德澤益浹ク、頌音四海ニ

洋溢セム。臣等夙夜勤勉力ヲ戮セ心ヲ同クシ、忠藎ノ節ヲ勵

マシ、報効ノ誠ヲ竭シ、以テ 聖旨ニ答ヘ奉ラムコトヲ誓フ。

臣等 幸ニ盛儀ニ班列シ、瑞雲ノ鳳殿ヲ繞リ仁風ノ錦幘ヲ颯

スヲ望ミテ、聳慶躍悅ノ至ニ任フル無シ。臣重信帝國臣民ニ

代リ、恭シク大禮ヲ賀シ、千萬歳ノ壽ヲ上ツル。臣重信誠懽誠

喜頓首頓首、謹ミテ言ス。

大正四年十一月十日

内閣總理大臣正 二位勳一等伯爵

臣 大隈重信

抱負

希望。こころざし。

一哲學者。文學

博士。早稲田

京師大學及び

教授。明治三

十六年。

太古は漢

おほ昔の事は

居て明らかで

ない。

史筆以來

歴史が文に記

されたこのか

朝宗

河水が海や大

流に注ぎこむ

こと。こゝで

は各國の歴史

といふ小流が

世界歴史とい

ふ大潮流にあ

つまりそゝぐ

ことがあつた

すの世界史を

なすのをいふ。

(二)日耳曼民族。

法王政

羅馬法王が政

自修文

一 國民の抱負

大(一) 西 祝

太古は漢たり。史筆以來世界の文明は滔々として進行しつゝあるなり。而して世界諸國の歴史の河流は、遲速の別こそあれ、遂に世界歴史といふ一大潮流に朝宗する運命を有するものの如し。然れども世界の文明に力を致すに於て、各國其の趣を異にせざるなし。古昔に於て、猶太人は地上に神の王國を建つるを以て其の覺悟とし、希臘人は文藝學術を傳播するを以て其の天職とし、羅馬人は世界の帝王を以て自ら任じ、蠻夷の襲撃を受けたる後に於て、なほ世界の女王たる位置を保ち、遂に政權を剝奪せらるゝに及んでは、法王政を建て、精神的帝王となりて世界に君臨したり。降つて近世に至り英人を見るに、彼等は己が運命は海上權を掌握し、遠隔

精神的帝王 宗教上の覇權を握つて居た
 自主 自分が主たるものであること。獨立であること。
 寄與 力をつくすこと。貢獻すること。
 文明の潮流 文明の進み行く有様をうしほの流れゆくにたとへた語。
 斬新 從來と變つた新しいこと。
 驚天動地 天をおどろかし、地をうごかすこと。即ち大いに世をおどろかすこと。このは佛國大革命及びナポレオン戰役をいふ。
 瞠若 ほどろいて目を見はるること。

の地に殖民をなすにありと信じ、米人は其の國土を以て、あらゆる方向に自主自由を發達せしむる舞臺となし、獨人は科學及び政治上より世界に一大寄與をなすを以て其の抱負となし、佛人は人間的の思想感情を世界に弘布するを以て其の任務と信じ居るなり。而してこれ等諸國民が文明の潮流に力を致す模様を見るに、終始間斷なく力を致すこと甚だ稀にして、恰も流星の天に顯れて忽ち滅するが如く、極めて短き時限中に於て、其の國民特有の性質上より斬新なる寄與をなして、世界の文明を鼓舞し、一たび其の職分を盡し終れば、其の國は疲勞衰頹して、時機再び到來し元氣恢復するまでは、永く沈靜の狀態に没するものの如し。尤も一方より見れば、諸國民は間斷なく世界の文化に貢獻しつゝありといひ得ざるにあらず。されど最も著しく世界の文明を鼓舞し、諸國民注意の焦點となり、世界を震動風靡する國民は、一時代に於ては大抵たゞ一あるのみ。希臘の盛なるに當つてや、世界の諸國は睡眠の裡にあり、羅馬起れば希臘は既に廢れたり。近世に於て、佛國が驚天動地の活劇を演ずる時は、英、獨しりへに瞠若として退き、米國が獨立自由の旗

旗幟 旗のぼり。
 呆然 呆然とあきれさすま。

座 ぼしよ。

蠢動す ちんどうす
 く。うよ／＼うご

幟を樹つるに當つては、世界の諸國呆然として爲す所を知らずかくの如く、世界の勢は同時に各處に發顯するものに非ずして、一定時には一定處を限りて其の集合點となし、此の點に於て爆裂するものの如し。其の破裂の餘波は數十百年に亘ることありと雖も、其の破裂するは實に一刹那の間に在り。而して破裂の座となりたる國土を以て、世界文明の寄與者たる資格ある者なることを吹聴廣告するなり。

余輩近世の歴史を讀んで、私に思ふ、世界の勢が歐米の土に破裂する時は最早過去りつゝあるにあらざるかと。歐米諸洲今日の運動は頗る盛なれども、こは寧ろ過去破裂の餘勢によりて動くものにして、大勢破裂の中心點は、漸く東方の國土に廻轉しつゝあるにあらざるかと疑ふ。太古に於ては、東洋の國土は實に世界の勢の破裂點となり、世界文明の潮流は其の源を東洋に發したりしなり。東洋の諸國民が世界の活劇を演じ、偉大なる功績を奏したる日に於て、西洋諸國は隣にも暗黒の裏に蠢動したりき。然れども世界大勢の轉ずる所如何ともすべからず、東洋諸國はこの勢の去ると共に漸く沈靜

大義 人のとるべき
 重大な義理。
 名分 道徳上、名義
 に應じて必ず
 守るべき務。
 權謀術數 權謀も術數も
 共にはかりご
 と。
 一視同仁 すべてのも
 を平等に愛す
 ること。
 大道を體す 大道をよくの
 みこむ。
 説破 いひやぶるこ
 と。
 勦誅 ほろぼすこ
 と。
 土芥も膏な
 らず つちやあくた
 よりもまだ何
 とも思つて居
 ない。
 まづ指を云
 云 日本人が第一
 番である。

時は、其の中に我が國民今日の覺悟となして尙可なるものあるを發見せず
 んばあらず。維新の俊傑、多くは天下を以て自ら任じたる人なり。彼等は如何
 なる事を以て日本の抱負とし、如何なることを以て日本の覺悟としたるか。
 彼等は、大義名分を四海に布くを以て日本の抱負とし、權謀術數を去り、至誠
 世界に立つを以て日本の覺悟とし、一視同仁、天地の大道を體し、天に代りて
 世界の横道を説破討伐勦誅し、萬國安全の道を示すを以て日本の天職と考
 へたるなり。其の元氣の宏壯なる、轉た人をして發奮措く能はざらしむ。此の
 元氣と此の覺悟とありしが故に、維新の改革は成就せられ、鎖國攘夷の固陋
 心は打破られたるなり。維新以來日本が駸々として進歩し、今日の如く力量
 を有する國となりしは、實にこの元氣と覺悟とありしが故なり。我輩は日本
 人には種々なる缺點あるを知る。日本人はなほ幾分の修練と困難とを経過
 せざれば、決して大國民となること能はざるを知るものなり。然れども世界
 中に於て大義名分の爲に狂奔し、忠誠の爲に一身を抛つこと土芥も膏なら
 ざる民ありとせば、まづ指を日本人に屈せざるを得ざるべし。至誠の極、或は

身を殺して
 仁を爲す
 仁の爲にはわ
 が身を殺して
 顧ない。
 私慾の汎濫
 世界が滔々と
 して私慾に走
 ること。
 聖肘 檢束を加へて
 自由にはたら
 かせないこ
 と。
 大道の化身
 大道そのもの
 がかたちとな
 つてあつたはれ
 たもの。
 警醒す 眼をさまして
 とらせるこ
 と。

輕卒の舉動に出で、大事を誤る如き同胞なきにあらずと雖も、身を殺して仁
 を爲すを覺悟すること極めて迅速に、死して悔ゆるなきもの、日本人の如き
 は世界國民中多くその比を見ざる所なり。日本人は道徳義務の爲に熱狂す
 る國民なりといふとも、誰か然らずといふ者あらん。果して然らば、日本が世
 界の文明に對してなすべき最大の寄與は、道徳上の教訓にあらざるか。日本
 は道徳上に於て世界の師表となり、世界より利慾の汎濫を排除すべき一大
 任務を有し居るにはあらざるか。日本帝國が開闢以來絶海に孤立し、世界の
 腐敗の外に超越し、清潔美麗なる風土山川に養育せられ、君臣、父子、夫婦、兄弟、
 朋友の道正しく、大體よりいへば、殆ど理想に近き國家を經營し來りたるは、
 他日大いに世界の腐敗を掃蕩するが爲にはあらざるか。天下の微弱を扶持
 誘掖し、驕傲無禮を掣肘壓倒し、世界の私心を根絶し、道徳上の帝王となりて
 世界に君臨するは、日本が其の特質上より世界の文明に對して爲すべき最
 大寄與にはあらざるか。余輩は日本が天地大道の化身となりて萬國民を警
 醒する大抱負を實現すべき時機の到來せんとするを思ひ、欣喜措く能はざ

るものあり。

大西博士全集

二 俚諺論

大 西 祝

言ふも更なり
(一) 武士は食はな
 つかつて平氣
 な顔をして居
 る。
(一) 武士は食はな
 つかつて平氣
 な顔をして居
 る。
 相身互
おが身にひき
 くらべて他を
 思ひやるこ
 と。
 地頭
鎌倉幕府の職
 役、軍役を
 勤め、盜賊を
 追つて捕へ、
 徒等を捕へ、
 随つたのてで
 人あつたは非
 問はず其の言
 に従つた。

一國民の言ひなれたる俚諺の内容を深く研究すれば、其の國民の歴史、氣質、風俗、人情、學術、宗教、社會制度等、其の一切の生活と、其の生活の理想とに就いて發見するところ多々あるべし。花は櫻木、人は武士、といふ美しき諺は言ふも更なり、武士は食はねど高楊子、武士は相身互、といふ如きは、我が國の歴史に大光彩を放てる武士といふ階級の理想を窺ふに足るべく、またこれによりてかゝる理想を愛重したりし全國民の氣風を察し得べし。泣く子と地頭には勝たれぬ、といふを見れば、千萬言の歴史的敘述に劣らず、我が國の歴史の或時代に於ける地頭といふものの勢力の如何なりしかを察知し得べく、女は三界に家なし、貞女は両夫に見えず、といふなどは、我が國に固有なる諺とはいふべからざれども、亦以て婦女子に關する我が社會制度の一面を窺ふに足るべく、嫁が姑になる、老いては子に従へ、といへば、我が國の家族制

他生の縁
前の世からの
 いんねん。

(一) 子は過去、現在、未來とも離れないもの、罪人などの首枷にはめる刑具。
 稱ふるもの
となへはする
 ものの。
 自我心
自分の利益を
 主とする心。
 利己心。

度を示すところあり、さはらぬ神に祟なし、棄てる神あれば拾ふ神あり、正直の頭に神やどる、苦しい時の神だのみ、などは宗教思想を示すべく、袖ふり合ふも他生の縁、といへば、以て佛教によりて注入せられたる因果思想を見るに足るべし。

歐洲諸國の諺には、夫婦の關係をいへるもの甚だ多く、我が國にては寧ろ親子の關係をいへるもの多きが如し、親の心子知らず、子を知るもの親にしかず、かはゆい子には旅をさせよ、子は三界の首枷、子が思ふより親は百倍、といふなど、親の慈をいふや至れり盡せり、その上に、子よりも孫はかわゆい、といへる、何の言か之にまさりて孫に對する愛の濃やかなることを發表するものぞ、かく親の慈愛を稱ふるものから、俚諺はまた能く人情の他面をいふ、子を棄つる藪はあれど身を棄つる藪なし、とは、吾人の自我心を穿てるものと謂ふべし。

一般の人情に自利の念ほど強きはなかるべし、俚諺の如何に多くが損得の念を主とせるものなるかを見よ、而して其の中に如何によく普通の人情

(一)もらふ物なら
夏の小袖も違
感せぬ。
(二)敵の家でも食
べたる事が出来
たら食べよ。
(三)泣く子でも人
目を見て意中
をくむ。
(四)子曰、知之
爲知之、不知
爲不知、不知
是知也。(論
語)

を穿てるものあるかを見よ。下ざるものは夏も御小袖^(一)かたきの家でも口をぬらせ。ころんでも只は起きぬ。泣く子も目を見るまことに然り。泣く子自身を護るには油断せざるなり。油断大敵。小を棄て、大に就け。長いものは卷かれよ。曲らねば世に立たれず。など、いづれか利益の念を主とせざる。聖人は、知らざるを知らずとせよ。といひ、俚諺は、知つて知らざれ。といふ。鷹は死すとも穂をつまず。など、氣概を稱揚するもあれど、俚諺の大體の教訓は、賢かれ、損をすな。といふにあり。

世態
まの
ありさ

俚諺は事の一面を見て之を誇張して言ふ傾あるものから、其の他面をいふに躊躇せざるが故に、一見其の判断の相反するが如く思はるゝものあれど、かく両面よりいふ所、よく世態人情の實相にかなひて、其の判断概ね公平なり。すきこそ物の上手なれ。といへど、下手の横ずき。といふことを忘れず。親に似ぬは鬼子。といへば、形生めども心は生まず。といふ。かく事の両面を叩いて世相の内幕、人情の裏面を穿たんと力むる、これ即ち俚諺が警戒と諷刺とに富める所以にして、中には一言よく人情の裏面を評きて、巧に罵倒し了するものあるなり。

大西博士全集

(一)仁治三年京都
から鎌倉まで
の行旅を寫して
た東關紀行の
中。作者は源
親行と傳ふ。
(二)京都東山。
(三)陰曆八月十五
日(後には十五
六日)信濃か
十日(朝延に奉
集紀貫之逢
坂の關の清水
に影見えて、
今かひくらん
望月の駒。一
木綿付鳥
鷄。
(四)支那戰國時代
孟嘗君の故事
於殘月。函谷
鷄鳴。
(五)平安朝の頃逢
坂の關に住ん
だ盲人。琵琶
の名手と傳
ふ。
(六)世の中はと
てもかくても
すましくても
宮も藁屋もは
ば。ば。ば。ば。
(七)今昔物語に蟬

三 東路の旅

東山の邊なるすみかを出でて、逢坂の關打過ぐる程に、駒ひきわたる望月の頃もやうく、近き空なれば、秋霧たちわたりて、深き夜の月影ほのかなり。木綿付鳥かすかに音づれて、游子なほ殘月に行きけん函谷の有様思ひ出でらる。昔蟬丸といひける世捨人、此の關のあたりに藁屋の床を結びて、常に琵琶を弾きて心を澄し、和歌を詠じて懷を述べけり。嵐の風の烈しきを佗びつづ過しける。

いにしへの藁屋の床のあたりまで
心をとむるあふさかの關

關山を過ぎぬれば、打出演、粟津原など聞けども、未だ夜の中なれば、さだかにも見え分かず。昔天智天皇の御代、大和の國飛鳥の岡本宮より近江の志賀の郡に都遷ありて、大津宮を造られけりと聞くにも、此のほどは古き皇居の

丸の歌「逢坂の關の嵐のしげしきに、しひてぞあたる世をすごととて。」

心をとむる

注意をひく。

(一)琵琶湖。

(二)萬葉集歌人の

呂。養朝臣の

人。

(三)世の中は何

にたとへんあ

さぼらけ、こ

ぎゆく舟のあ

との白波。

(四)滿橋沙彌。

近江國栗太郎

老上村。

とこそせし

かへつたに露が

白樂天の句に

昆明春。昆明

春。春池岸古

南山。青泥濘。

波沈。西山。紅

淵論。

混濘

深くしてひろ

いありさま。

かつみ

址ぞかしと覺えてあはれなり

さ々波や大津の宮のあれしより

名のみ残れる志賀のふるさと

曙の空になりて、勢多の長橋打渡すほどに、湖遙かにあらはれて、かの滿誓

沙彌が比叡山にて此の海を望みつゝ詠めりけん歌思ひ出てられて、漕行^(三)

舟のあとの白波、誠にはかなく心細し。

世の中をこぎゆく舟によそへつゝ

ながめし跡をまたぞながむる

此の程をも行過ぎて、野路といふ處に至りぬ。草の原露繁くして、旅衣いつ

しか袖の雫とこそせし。

篠原といふ處を見れば、西東へ遙かに長き堤あり。北には里人住家を占め、

南には池の面遠く見え渡る。むかひの汀緑深き松のむらだち、波の色も一つ

になり南山の影を浸さねども、青くして混濘たり。洲崎處々に入りちがひて、

葦、かつみなど生ひ渡れる中に、鴛鴦、鴨の打群れて飛びちがふさま、葦手を書

けるやうなり。昔都を立つ旅人此の宿に泊りけるが、今は打過ぐるたぐひの

み多くして、家居も疎になりゆくなど聞くこそ、變りゆく世の習、飛鳥の川の

淵瀬には限らざりけめと覺ゆ。

行く人もとまらぬ里となりしより

あれのみまさる野路の篠原

行暮れぬれば、武佐寺といふ山寺のあたりに泊りぬ。まばらなる床の秋風、

夜更くるまゝに身にしみて、都にはいつしか引きかへたるこゝちす。枕に近

き鐘の聲、曉の空に音づれて、かの遺愛寺の邊の草の庵の寢覺もかくやあり

けんとははれなり。行末遠き旅の空思ひ續けられて、いといたう物悲し。

都出でていくかもあらぬ今宵だに

かたしきわびぬ床の秋風

音に聞きし醒井を見れば、陰暗き木の岩根より流れ出づる清水、あたり涼

しきまで澄渡りて、實に身にしむばかりなり。餘熱未だ盡きざる程なれば、住

還の旅人多く立ちよりて涼み合へり。かの西行が、

まこもの古

名。

葦手

一種。

(一)古今集の歌

に「世の中は

何かつねなる

飛鳥川、昨日

の淵は今日の

瀬となる。」

(二)朗詠集白樂天

の句に「遺愛

寺鐘欲枕聽、

香爐看雪撥

簾看。」

(三)都を出てま

だ幾日にもな

らな秋風がさむく

床におとづれ

敷いて、片袖を

にいかにも感

ぜらわびしく感

しぐれわた
松風の音が時
雨に似てゐる
といふ。

谷川二云々
谷川が霧の底
でひびくのを
いふ。

(一) 藤原良經。

(二) 新古今集一人
すまぬ不破の
關屋の板びさ
しあれにし
後はたゞ秋の
風情もめぐ
らしがたし
すぐれた歌想
も得られさう
でない。

なかくに
覚えて
かへつてつま
らなく覺え
て。

(三) 拾遺集源順の
歌「水のおも
に照る月な
みをかぞふれ
ば、こよひぞ
秋の最中なり
ける」。

(四) 「三五夜中新
月色。二千里
外故人心」。

固陰五寒六
冬がなほ深く
寒さきびしい
こと。

雪肌玉骨
白く清らかな
はだと、玉の
やうな骨。美
人を形容する
に用ひる。

標致
あらはすこ
と。(女の美
を、らはずも
の、即ち器量
のこと。雪肌
玉骨の語に對
して特に此の
語を用ひた。

七寶七
七寶。

茅舎竹籬
かやぶきの家
に竹の垣ね。

芳馨八
よいかをり。

偃蹇九
ふしまがつて
居るさま。

(一) 西曆二二〇〇年
より二八〇〇年
まで魏、吳、蜀
の三國支那に
鼎立した時に
代。

(二) 吳の人。字は

道のべに清水流るゝ柳かけ
しばしとてこそ立ちどまりつれ
と詠めるもかやうの處にや。

道のべの木陰の清水むすぶとて

しばしすまぬ旅人ぞなき

柏原といふ處を立ちて、美濃の國關山にもかゝりぬ。谷川霧の底にもおと
づれ、山風松の梢にしぐれわたたりて、日影も見えぬ木の下道あはれに心ほそ
し。越えはてぬれば不破の關屋なり。萱屋の板庇年經にけりと見ゆるにも、後
京極攝政殿の「荒れにし後はたゞ秋の風」とよませたまへる歌おもひ出でら
れて、此の上は風情もめぐらしがたければ、鄙しき言の葉をのこさんもなか
なかに覺えて、此處をば空しく打過ぎぬ。

株瀬川といふ處にとまりて、夜ふくるほどに川端に立出でて見れば、秋の
最中の晴天清き川瀬にうつろひて、照る月なみも數見ゆるばかりに澄みわ
たれり。二千里(四)の外の故人の心思ひやられて、旅の思いと抑へ難く覺ゆれ

ば、月の影に筆を染めつゝ、花浴を出でて三日、株瀬川に宿して一宵、しばし
幽吟を中秋三五夜の月に傷ましめ、かつく遠情を前途一千里の雲に送る。
など、ある家の障子に書きつくるついでに、

知らざりき秋のなかばの今宵しも

かゝる旅寝の月を見んとは。

—東關記行—

四 梅

藤岡作太郎

固陰五寒六、草木なほ凍枯せる時、雪肌玉骨ひとり高く標致するものは梅花
にして、菊花の行く秋に後れて凋むと共に、高節遙かに群芳を抜く。牡丹は貴
客、梅は隱士、彼は金屏を廻らし七寶七の花瓶に挿みて見るべく、此は茅舎竹籬、
牛の聲する邊に尋ぬべし。華麗は櫻花に及ばざれども、芳馨八は薔薇に比して
別に特長あり。冷艶、玉を綴つて疎々たり。老幹、龍を横たへて偃蹇九たり。清風雅
韻、百花の魁たるものこの花を措いて何かある。

支那の文人は酷一〇だ梅花を好み、三國の末陸凱一一といへる人これを江北の

敬風。寶鼎の初。相となつた。江北。揚子江の北。梅を折つてちやうど驛使に逢つた。江南にはこれといふものもない。君に聊か一枝の春を贈る。

(二) 詩人。名は述。廬を西湖の小孤山に結び、四面皆梅を植ゑた。天禧四年(西暦一〇四〇)歿。年六十二。

絶唱。すぐれた詩。(三) も、しきの大宮人は暇あれや、梅をかざしてこゝに。 (萬葉集) (四) わが宿の梅咲きたりと告げやらば、來ちふに似たり散りぬともよし。(萬葉集)

(五) 春の夜の闇はあやなし梅の花、色こそ見えぬ香やは隠る。(古今集) (六) 人はいさ心も知らず古里は、花ぞ昔の香にほひける。(古今集)

(一) 今神戸市中。(二) 徂徠と號す。江戸の儒者。享保十三年(一七三二)歿。年六十三。

友に贈つて曰く、折梅逢驛使、寄與隴頭人。江南無所有、聊贈一枝春。宋の時、林和靖といへる高士、西湖の畔に棲み、梅を植ゑ、鶴を飼へり。屢、舟を湖中に泛べて遊ぶに、客至れば童子鶴を縦つてこれを報ず。その梅を詠じたる句に、疎影橫斜、水清淺、暗香浮動、月黃昏。といへるは、梅花詩中千古の絶唱と稱せらる。

わが國に於ても既に萬葉古今の歌集に梅花の詠多し。百礮城の大宮人は梅を挿頭して野邊に遊び、わが宿の梅咲きたりと告げやれば、好事の士は誘はずとも來る。或は闇の夜に、色こそ見えぬ香やはかくる。と稱へ、或は昔ながらの花を見て、人はいさ心も知らず。とあやぶめり。菅原道真十一歳にして「月耀如晴雪、梅花似照星」と賦せしが、後年太宰府に左遷せられ、將に家を出でんとして庭前の梅を眺めていはく、こらふかばにほひおこせよ梅の花あるじなしとて春を忘るな。藤原公任亦幼にして宮中に候して、

しらら、としらけたる夜の月影に雪かきわけて梅の花をると詠みければ、主上深く歡感まし、公任もまた生涯の思出この時にありきといへりとぞ。傳へていふ、前九年の役安倍宗任捕虜となりて京師に入れるに、卿相雲客「奥の夷のさこそ無骨なるらめいざ戯れて笑はん」とて一枝の梅を示して、これは何ぞと問ふ。宗任とりあへず、我が國の梅の花とは見つれども大宮人はなにといふらんと答へたるに、一座しらけて耻入りぬとなり。源平の亂生田の森にて梶原景季片岡の梅盛なるを手折り、箆にさして奮戦せるに、花は風に吹かれて鎧上に散れるを、敵も味方もやさしき武士のふるまひかなと感じけりとかや。梅が香や隣は荻生惣右衛門とは、元祿の頃其角が名聲喧傳せる學者徂徠をその花に喩へて賛したるもの

梅一輪一輪ほどのあたゝかさ

絶えくゞに温泉の古路や苔の花
 渡りかけて藻の花のぞく流かな
 夕暮や野に聲のこる麥の秋
 秋立つや雲は流れて風見ゆる
 秋來ぬと合點させたる嚏かな
 がつくりとぬけ初むる齒や秋の風
 あかゝと日はつれなくも秋の風
 新月に蕎麥うつ草の庵かな
 欠して月ほめてゐる隣かな
 名月や門にさし來る潮がしら
 名月や壘の上に松のかけ
 名月や烟這ひゆく水のうへ
 名月や夜は人すまぬ蜂の茶屋
 三井寺の門たゝかばやけふの月

芭 蕪 嵐 其 芭 几 芭 杉 蕪 樽 楚 凡 蓼
 蕉 村 雪 角 蕉 董 蕉 風 村 良 秋 兆 太

鯛は花は見ぬ里もありけふの月
 荒海や佐渡に横たふ天の川
 更けゆくや水田の上の天の川
 星月夜空の廣さよ大ききよ
 霧しぐれ富士をみぬ日ぞ面白き
 霧の香や松明すつる山かつら
 初潮に追はれてのぼる小魚かな
 枕上秋の夜を守る刀かな
 立去ること一里眉毛に秋の峯寒し
 荒れくゞて末は海行く野分かな
 ののしゝも共に吹かるゝ野分かな
 薪ともならて朽ちぬる案山子かな
 雁金の竿になる時なほ淋し
 牛叱る聲に鳴立つ夕かな

西 芭 惟 尙 芭 白 蕪 猿 芭 正 去 支
 鶴 蕉 然 白 蕉 雄 村 雖 蕉 秀 來 考

三訂帝國讀本卷十終

通用字及び正字對照表

(茲に其の主なるもののみを擧ぐ。本
書には主として通用字を用ひたり。)

劔	剪	刃	函	滅	涼	準	况	決	冒	兔	免	佞	仍	兩	通用		
劍	劔	刃	函	滅	涼	準	況	決	冒	兔	免	佞	仍	兩	正		
冤	墻	塚	塲	噴	器	唇	叙	収	厨	厨	卿	鄉	即	効	通用		
冤	墻	塚	塲	噴	器	脣	叙	収	厨	厨	卿	鄉	即	効	正		
拔	拿	戲	懺	懺	懺	恒	往	稟	屏	并	帽	尅	寶	寇	通用		
拔	拿	戲	懺	懺	懺	恆	往	稟	屏	并	帽	剋	寶	寇	正		
濱	温	水	殲	欸	概	桿	晋	昂	既	整	擗	擗	擗	插	通用		
濱	温	冰	殲	欸	概	杆	晋	昂	既	整	擗	擗	擗	插	正		
盃	鼓	痴	畧	留	畫	瑣	玄	猫	猪	猿	熔	陰	潜	濶	通用		
杯	鼓	癡	略	畧	畫	瑣	玄	貓	猪	猿	鎔	陰	潛	闊	正		
織	績	績	紀	穀	粘	籤	纂	節	竽	竊	秘	願	穎	研	通用		
織	績	績	紀	穀	黏	籤	纂	節	竽	竊	祕	願	穎	研	正		
厠	勅	冲	侏	俟	京	亡	並	万	脉	聳	耻	羹	群	罰	纏	通用	
廁	敕	沖	俶	埃	京	亾	並	萬	脈	聳	恥	羹	羣	罰	纏	正	
婚	姉	妍	妊	野	坂	囁	叶	厮	同	莽	艷	館	舖	阜	致	腸	通用
婚	姉	妍	妊	野	坂	囁	叶	厮	同	莽	艷	館	舖	阜	致	腸	正
考	慙	富	忘	庵	嶋	峯	峩	岳	同	記	解	霸	褒	衛	蔭	萌	通用
考	慙	富	忘	庵	嶋	峰	峨	嶽	同	記	解	霸	褒	衛	蔭	萌	正
概	槁	楫	棕	基	案	柿	村	普	同	軟	賈	贊	賓	象	讎	識	通用
槩	槁	楫	棕	基	案	柿	村	普	同	軟	賈	贊	賓	象	讎	識	正
砧	睹	狸	貉	無	烟	汗	毘	朴	同	馱	隸	隙	間	鎖	隣	輒	通用
砧	睹	狸	貉	無	煙	汗	毘	樸	同	馱	隸	隙	間	鎖	鄰	輒	正
緇	總	網	紅	紮	粽	笱	競	稿	同	爵	鬪						通用
襍	總	網	紅	糾	糉	筍	競	稟	同	鬱	鬪						正

附錄

羈 船 羈
 船 船 船
 花 荒 花
 華 荒 華
 衽 訛 衽
 衽 譌 衽
 蹤 蹤 蹤
 蹤 蹤 蹤
 遁 銜 遁
 銜 銜 銜
 雁 雞 雁
 雁 雞 雁
 驅 鷄 驅

本來ハ異字ナレドモ同字若シクハ略字トシテ往々混用セラル、モノ。
 *標ヲ附シタル文字ニ限リ、慣用ニ從ヒテ強ヒテ區別スルニ及バズ

巨 互

恒ニ同シ。
 「連互」

體 體

笨ニ同シ。アラシ、龜、粗。
 カラダ。

但 但

タマシ、タマシ。「但馬」
 ツタナシ、拙劣。

僭 僭

ミダリガハシ、猥。
 自分ヲ越エテオゴル。「僭越」

胃 胃

カブト、兜。「甲胃」
 ヨツギ、嫡子。又子孫。「胃裔」

託 託

拓ニ同シ。オス、ヒラク。
 ヨル、タノム、ユダヌ、カコツク。

擔 担

ハラフ。又アゲ。
 ニナフ、カツク。

改 改

鬼ヲ追フトイフ星ノ神。
 アラタム。

鎗 槍

ヤリ。
 鏑ニ同シ。鐘ノ聲ノ形容。

欠 欠

アクビ。「欠伸」
 カク。「缺席」

糸 糸

ホソイト、細絲。
 イト。

羨 羨

支那ノ地名。
 ウラヤム。

協 協

カナフ、叶。
 オビヤカス、脅。

刺 刺

サス。「刺殺。刺客。名刺」
 モトル、ソムク、垂展。「亞刺比亞」

台 台

星ノ名。又敬意ヲ表スル爲ニ語ノ上ニ添フ。「台覽。台臨」
 ウテナ、ダイ

后 後

ノチ、アト、ウシロ、シリヘ、オクル。
 キミ。「皇后」

商 商

アキナヒ。
 モト、本。

壺 壺

ツボ。
 ミチ、宮中ノミチ。

姬 姬

ツ、シム。
 ヒメ。

蟲 虫

魚介類ノ總稱。又ママシ。
 ムシ。

訖 訖

ワビ、ワブ。「訖狀」
 訖ニ同シ。アザムク。

詔 詔

ヘツラフ。
 ウタガフ、疑。

証 證

アカン、シルシ。「證明」
 イサム、諫。

豊 豊

禮ノ古字。
 エダカ。

迄 迄

マデ。
 エク、行。

撰 選

エラブ。(ヨリトル)
 エラブ。(書物ヲ編纂ス)

卻^{シキ} 卻^{シキ} 鍛^{タシ} 鍛^{タシ} 鍛^{タシ}

ヒヤ、隙。
シリゾク。「退却」
キタフ。「鍛錬」
シヨロ、「鍛」

宛 字 (左の如き字は假名を
使用するをよしとす)

おぼつかなし 覺束なし
かひ(證の意) 甲斐
きつと 屹度
さすが 流石、遠
しまふ 仕舞ふ
せつかく 折角
だけ 丈
だめ 駄目
ちやうど 丁度
ちよつと 一寸、鳥渡

附 録 終

てたらめ 出鱈目
とうく 到頭
とかく 兎角、左右
とて、とても 迎
とにかく 兎に角
なかく 中々、却々
ふるまひ 振舞
はかなし 果敢なし
ほんたう 本當
むだ 無駄
むづかし 六ヶし
やたら 矢鱈
やはり 矢張

原 山 良 原

大正十二年十月三日 版三訂六版發行
大正十一年十月十日 版三訂四版發行
大正十年十月十日 版三訂四版發行
大正九年十月十日 版三訂四版發行
大正八年十月十日 版三訂四版發行
大正七年十月十日 版三訂四版發行
大正六年十月十日 版三訂四版發行
大正五年十月十日 版三訂四版發行
大正四年十月十日 版三訂四版發行
大正三年十月十日 版三訂四版發行

(三訂帝國讀本)

價	定
卷一、二、三、四、各金四十五錢	卷一、二、三、四、各金四十五錢
卷五、六、各金四十五錢	卷五、六、各金四十五錢
卷七、八、各金三十七錢	卷七、八、各金三十七錢
卷九、十、各金三十六錢	卷九、十、各金三十六錢
年價定	年價定
卷一、二、三、四、各金七十七錢	卷一、二、三、四、各金七十七錢
卷五、六、各金六十八錢	卷五、六、各金六十八錢
卷七、八、各金六十三錢	卷七、八、各金六十三錢
卷九、十、各金六十一錢	卷九、十、各金六十一錢



發 行 所

東京市神田區
通神保町九番地

合資
會社

富

山

房

東京市小石川區音羽町七丁目六番地

富山房印刷所

代表者 坂本嘉治馬

印刷行 兼合資會社 富山房

著者 芳賀矢一

東京市神田區通神保町九番地

電話神田二四二、二四三、二四四番
振替口座東京五〇一番

広島大学図書

2000067991

